チャック全開ですよ

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チャック全開ですよ

【Ｎコード】
Ｎ４８７５Ｘ

【作者名】
雨月

【あらすじ】
憧れの生徒会長に告白し、成功をおさめた新戸風太郎。しかし、その日の放課後、クラスのアイドルに告白されうやむやな関係になる。彼は無事に高校生活を送れるのだろうか。

第一話：人生の分岐点

第一話

俺、新戸風太郎は中学生の頃から一学年上の先輩の事が好きだった。しかし、恥じらう乙女のごとき心境でなかなか告白できず、気が付いてみれば高校二年生。先輩を追っかけて入った高校の入学式では先輩は既に生徒会長をやっており、先輩にあこがれている男子生徒（バル）は掃いて捨てるほどいた。

俺が二年になったと言う事は先輩が留年でもしない限り三年生になり、時期卒業するのだ。先輩が留年する事もなく、四月の二週目の昼休みとなった。

「おい、顔色悪いぜ？」

「……これから人生の分岐点に行って来るだけだ」

俺はとうとう先輩を校舎裏に呼び出して告白した。そこらのへたれとは違うのだ。

「そうか、新戸は私の事が好きだったんだな……うん、いいぞ」

先輩と俺のめくるめくバラ色の高校生活が始まるのだとその時は信じて疑わなかった。もちろん、すれ違いや些細なことでの喧嘩、仲良くなる下校時の出来事等、酸いも甘いも体験していくんだろうなと思っていたその矢先、正確に言うなら先輩に告白してオーケーしてもらったその日の放課後の事だった。

自分の下駄箱の中に都市伝説か何かと思われていたラブレターなるものが入っていたのである。内容は俺の事が入学時から気になっていた事、今日の放課後に裏庭に来てほしい事が書かれていた。きっとこれは知り合いの悪戯であろう、そう思って俺は無視するこ

とに決めた。だが、何故かクラスメートが俺の前に立ちふさがる。
「おいおい、帰っちゃうと大変なことになるぞ」
「どうせお前が書いたんだろうが。俺にはお見通しなんだよ……こんな繊細で乙女っぽい字はお前か、クラスのアイドルの中原美奈子さんだけだ」
「そう、中原美奈子さんからのお手紙だ。いけ、行ってお前の幸せを掴んでくるんだっ」
熱血入った声でそう言われて俺は裏庭まで連行されていった。
無理やり押され、俺は下を向いて待っていた中原美奈子さんの前にふらつきながら登場。彼女は俺を見ると初めて見るような照れた仕草をしていた。普段は物事をはっきり言うような委員長タイプなんだけどな。
「ご、ごめんね、いきなりあんな手紙出しちゃって…迷惑だったよね？」
生徒会長に告白をし、見事玉砕していたのならひざまずいて『ありがとう、あなたこそ私のメシアです』とのたまっていた事だろうな。
「ちょっとだけ…めいわ……」
「ごめん、本当……」
すっごく暗い表情に早変わり。なんだか罪悪感で胸がいっぱいになった。
「あー、いやいや。その、さ、ほら、俺って帰宅部じゃん？だから急いで帰ろうかなぁって思った時に靴の上に手紙が置いてあったから一生一度もらえるかどうかもわからないような手紙がくしゃくしゃになっちゃうかもしれないって意味で迷惑って言ったの。うん、直接渡してくれればよかったかなー、なんてね…あ、あはははは…自分で何言っているのかわからないやー」
「そっか、よかったぁ…」
心の底からよかったぁという表情を見せてくれている。
「そ、それでね、その、手紙に書いていたんだけど…あたし、新戸

君の事が好きなんだ」
「え、あ、あ～、そうなんだ。はは、もらった喜びで頭がいっぱいでよく読んでなかったよ～……具体的にはどういう事が書いていたのかなぁ」
「単刀直入に言うね、あたしと付き合って欲しいの」
この問いかけにうんとか応えると何だかすごく大変なことになる気がするのだ。いや、気がするんじゃなくてこれは二股と言う奴だろう。ばれたら大変どころか、想像に絶する事が起こるに違いない。
当然と言うか、断るしかないだろう。
「ごめ…」
「駄目なの？」
「俺にはか…」
ぶわっと目に涙がすごい勢いで溜まって行く。去年、他校の不良生徒数人を相手取ってなお説教をし、勝利をつかみ取った女の子が一切見せなかった涙を初めて見てしまった。
「俺にはカ……ンボジア帰りのおじさんの相手をしないから今日はちょっと急いで帰らないといけないんだ……すごく、ありがたい申し出なんだけど、その……嬉しいけど恥ずかしいからさ、友達からじゃ駄目かな？」
「そう、だよね。うん、いきなり付き合ってくださいとかおかしいもんね。うん、新戸君がそのほうがいいって言うのならそれでいいよ。驚かしちゃってごめんね」
「はは、いいよいいよ。俺もなんだか混乱しちゃって変な事を口走ってごめんね」
これなら俺は二股かけたことにはならず、世間的にも言って恋人と親しい友人が出来たと言うだけだ。
しかし、問題が一つある。俺に告白してきた女の子は中原美奈子。俺が告白した生徒会長の名前は加賀美美奈子なのだ。ま、まぁ、恋人と友達だしな。ニュアンスを間違えたりはしないだろう。
こうして俺の高校二年生は少し雲行き怪しく始まったのだった。

第二話：愛の詰まったお弁当

第二話

澄み切った青空はきっと青春を謳歌している連中の為にあるんだろう。憧れの先輩に告白し、彼氏彼女な関係となった俺だってその青春を謳歌している人間の種類に入るんじゃないだろうか。告白した、された次の日というのはもっと晴れやかでもいいと思うんだけどな。

「っはぁ～…」

「おーい、新戸～そっちにボールがいったぞー」

飛んできた言葉も右から左に抜けて行って俺の心は全く晴れない。たとえ、視界に白球が入ってきてもそれは俺を素通り……

「いたっ…」

することもなく、俺は鼻っ面に当たった白球で見事に転倒した。転倒するはずがないって？がけっぷちで小学生のタックルを不意打ちで喰らってみればいいさ。

「やっりー、新戸のエラーだねっ」

「てめぇ、なんでお前がここにいるんだよっ」

四月の体育、ソフトボール。先ほどの白球はどうやらクラスメートの田畑焔の放ったボールだったらしい。俺の名前も大概変だと言われるが、焔（ほむら）なんて名前つける親の顔が見てみたい。

「いいじゃないの、ソフト。みんなでやったらなお楽しいよ」

バットを乱暴に振り回しながら素人くさいスイングを続ける。ランニングホームランとなったようでイライラした俺は田畑に向かってボールを投げてやった。

かきーん……ごすっ。

「……」
「あ、ご、ごめーん。わざとじゃないんだよ」
悪い事はしちゃ駄目だね、しちゃったら後でひどい事が怒るんだよ…ぐすん。
そんなこんなでお昼休み。お腹の減った高校生にはこの時間が一番うれしいもので早速お弁当を取り出そうとするも、無い。
「新戸君、どうしたのですか？」
坊ちゃん刈りにぐるぐる眼鏡のクラスメートが話しかけてくる。俺としては生徒Aでも構わんが、名前は中州秀作という。それなりに頭がよく、それなりに人が良く、運動が出来ないが彼女（モニターから出てきてくれないのが悩みらしい）がいる少年である。
「俺の弁当が無いんだよ。もしかして中州が食べたのか？」
「食べるわけありませんよ」
「そうだよなぁ…」
購買には今から行ってもパンとか残ってないし、外のコンビニに買いに行くには外出許可申請とか面倒な事をしないといけないしで…どうしたもんだろうか。
「あれ、どうしたの？」
そんな時、中原美奈子さんが俺に声をかけてくれたのだった。
「新戸君のお弁当が消えたらしいのです」
「そっか、大変だね」
「うん、大変だ。しょうがないから中州達からちょっとずつおかずをもらってしのごうかなぁって思ってるところだよ」
「はい、これ」
凹んでいた俺に差し出されたのは可愛いハンカチーフで包まれた俺にとっては小さなお弁当箱だった。
「えーと、これは？」
「お弁当だよっ。新戸君、ううん、風太郎君の為に作ってきたんだよ。こんな言い方したら悪いけどお弁当が無いのなら食べてもらえ

るよね」
「そりゃもう、心の底から感謝するよ」
もしかしてこの娘っ子は俺の事を好きなんじゃなかろうか……いや、そういや昨日告白されたばっかりだったな。
ともかく、俺は急場をしのぐ事が出来たと言うわけだ。感謝感謝、中原さんには足を向けて寝れないな。
「本当は二人で食べたいんだけどこの後用事があるからごめんね」
「ああ、いや気にしないでいいよ。弁当ありがとう」
さっそうと出ていった中原さんを拝みながら俺は弁当のかわいらしい包みを広げる。
「ははぁ、まさか二人がそういう関係だったとは……でも新戸君、昨日生徒会長を呼び出していませんでしたか？って、結果はわかりきってますね。ごめんなさい」
勝手に勘違いしてくれた中州のことなんて放っておくことにした。別に友達から弁当をもらっただけだ、なんら問題はない。たとえそれが手作り弁当だったとしても、ご飯にハートが作られていたとしてもだ。
「おお、新戸よかったじゃないか」
田畑がこっちに机をくっつけてくるのを足で妨害しながら反論する。
「俺の弁当が無いから仕方がないだろう」
「そっかそっか、うんうん…ほほえましいなぁ」
あははと笑う田畑にこっちは心の中で色々と苦しんでるんだぞと言ってやりたかった。しかし、俺の弁当箱はどこに行ってしまったんだろう。

第三話：嵌められた風太郎

第三話

四月ももう終わりの最後の週、木曜日。放課後になって放送が鳴りだした。

『ピーンポーンパーンポーン……二年A組新戸風太郎、至急生徒会室前まで来なさい……ピーンポーンパーンポーン』

何故か『ピーンポーンパーンポーン』の部分が生徒会長の声だったが気にするまい。

「新戸、今度は何したの？」

「おい、やめろよ。それじゃ俺がいつも何かしでかしているようじゃないか」

「実際そうだと思うけどなぁ」

「一年生の時は学期中に一度は大きな事件を起こしていましたよ」

「そ、そうだったか？忘れちまったなぁ…ともかく、行って来る」

これ以上此処にいても過去の傷をいじられるだけだろうからな。恋人らしいことなんて先輩とはほとんど何もしていないし、甘い期待なんて持たずに行ったほうがよさそうだな。そりゃあ、生徒会室での密会（既に全校生徒に知れ渡っているが）なんてすばらしい話だけどな。

「実はな、女子生徒からの報告があって二階の渡り廊下の通風孔奥から異音が聞こえているそうだ。これから私と新戸で調べに行こうと思う」

「了解しました」

ま、やっぱりこういう事になるんだろうな。

渡り廊下は旧校舎とつながっており、人もそれなりに通る。通風孔は人が四つん這いになれば何とか通れるほどの大きさでいたずら防止のために特殊なネジで固定されているのだ。

やたら手慣れた手つきでネジを外し、自ら先に入りこむ。

「新戸、続けてきてくれ」
「わかりました」
こうやって先輩と一緒に何かの作業をしていると中学時代を思い出すな。

「新戸、裏庭の草取りに行こう」
「新戸、花壇に新しい花の種をまこう」
「新戸、職員室の掃除を頼まれた」

おかげで俺は先輩が卒業した後生徒会長に任命されましたけどね。
夕焼け、それなりの暗さの通風孔。じめじめとしたようなことはなく、手のひら、膝頭には少しだけ冷たい感じを受けるだけだ。そして、俺の視界いっぱいに広がるのは先輩のお尻。役得である。
「ここは他のところにつながっているとは聞いていないから、きっと途中でフィンがあるんだろう」
「そうですか」
「ああ、特に異常が見られなかったら今のままの状態で戻らないといけないからな」
つまり、先輩のお尻が迫り来るなかバックで出ないといけないってことか。それはそれでいいんだけどね。
ぼーっとしていたのが悪かったのか、先輩のお尻に顔をうずめてしまった。
「うわっぷ」
「……行き止まりだ。新戸、壊れたファンがあるくらいだから戻ろう」
「ふぇーい」
もうちょい先輩の尻に顔をうずめておけばよかったかなと思いつつ、バックで戻ることにした。光が差し込んでいるところまで戻り、

気が付く。
「あれ、閉められちゃってますよ」
「何？本当か？」
「はい」
足で何度か蹴っても開く様子はない。去年、馬鹿力の生徒が此処を開けようと力づくでやっていたようだが、開いたところは見たこともない。
「で、どうしましょうか」
先輩の尻を眺めつつのんきにそういう。先輩に任しておけば大丈夫だろうからな。
「……そうだな、先に進もうか」
さっきは行き止まりだと言っていた。しかし、先輩の事だろうから何か考えがあるのだろう。
先ほどの場所にやってきても今度は先輩のお尻に顔を埋めることなく、先輩が奥の方で立ち上がった。どうやら奥は立てるほどの広さがあるらしい。
「そのまま這って私の両足の間から頭を出し、肩車してくれ」
「わかりました。先輩はどうするんですか？」
「壊れたファンを外して外に出る」
その向こう側は外とつながっているようだな。こういった行動力に惹かれて告白したのもあるからな。ともかく、今は先輩に従っておこう。
先輩の股の部分から顔を出すと言う日常では殆どあり得ないイベントを楽しむ事もなく、俺は先輩を上に押し上げる。
「届きそうですか？」
「いや、無理だ。これから新戸の肩に足を置いて壁をつたって昇る。私が落ちたら支えてくれ」
こんな狭いところで落ちてきても支えられるんだろうか。でもまぁ、先輩が落ちるなんて事は絶対にないはずである。
さて、俺らはちょっとした緊急事態に陥っているわけだ。先輩の

両足は今や俺の両肩に乗っている。つまり、俺が九十度上を見ると何が見える状態だと思う？

ずばり、先輩のパンツが見えるはずだ。

そして、そんなちょっとエッチな事をしても誰にも気づかれることなんてないのだ。だって此処には先輩と俺だけしかいないのだから。

「よし、すぐに下を開けてやるからな」

結局、俺は上を見なかった。そして先輩は昇って行って外に脱出できたようだった。俺もこのまま続いてもいいけどせっかく先輩があけてくれるんだからそっちで待っておけばいいだろう。

先輩が脱出して十分が経過。

「先輩遅いなー」

目の前の鉄格子を揺らしてみるが、効果なし。気分は動物園の猿である。あ、猿は猿山だからゴリラあたりだろうか？

「あれ、新戸何してるの？」

そんな時、俺の目の前に田畑がやってきた。シュノーケルにランドセル、おまるを片手に持っていると言う違和感ありまくり…しかし、突っ込んでいる場合でもない。

「田畑…いい所に来たな。ちょっとこれ使って俺を助けてくれよ」

中から届かない為、工具があっても意味がない。俺はそれを外に放り出した。

「えー、どうしよっかなー」

そして工具を手に持ってにやにやとした笑みを浮かべる田畑。気のせいか、手に持っているおまるの面もそれに似ているようだった。

「頼む」
「へぇ、それが人に物を頼む態度なのかなぁ？」
くっ、相変わらず嫌な性格してやがる。
「お願いします」
「助けてあげたら何してくれるの？」
「な、何か一つ言う事聞いてやるよ」
「そっかそっか、それはいい事を聞いたよ」
数分後、田畑に助け出してもらって俺は何とか脱出する事が出来たのだった。
「いやー、今度の日曜日が楽しみだよ。朝から晩までスケジュール白紙にしておいてよ」
そういいながら田畑は去って行き、今度の日曜日はばっくれてやろうかと思ったりする。
「しかし、先輩はどこに行っちゃったんだ？」
仮にも俺って先輩の彼氏なのに…ここまで助けに来るのが遅いなんて何かあったのだろうか。
「……ともかく携帯も鞄の中だし教室に戻ってみるか」
「新戸―」
先輩の声が聞こえてきた。珍しく焦っているようだ。
「あ、先輩」
「悪い、いいわけだが生徒につかまってしまってなかなか開放してもらえなかったんだ」
「いいですよ。こっちは何とかなりましたから」
「それで、今度の日曜日償いをさせてもらいたいんだがどうだ？」
「あ、すみません。その日ちょっと友達と用事があるんで無理です」
「そ、そうか」
まるで神様が俺と先輩の中を引き裂こうとしているかのように予定が合わなかった。結局、先輩はその後も用事があったようで俺は一人空しく帰路についた。

第四話：妹分、愛夏

第四話

田畑焔と約束した日曜日の朝。携帯電話が鳴りだしたので寝ぼけ眼で探して耳に当てる。寝起きの悪い俺としては実にすばらしい反応である。

「……もしもし？」

『おっはよー、昨日はよく眠れたかな？』

「……ぐっすりだよ、お前に起こされて不機嫌だ」

『そっかそっかー、じゃあ十一時にデパート前集合ね。じゃあね～』

一方的に電話は切られ（いや、別に長電話したいわけでもないが）、俺は身体を起こす。

「……せっかくの休日、思えば先輩から誘われたと言うのにこっちを優先してしまうなんて俺はなんて律儀な人間なんだろうか」

某青狸の『半分小刀』があれば両方に行けたんだけどなぁ～テクノロジーの進歩と言う奴はローマの一歩みたいでまだまだ先のようである。

自室から出て顔を洗い、一階へと降りる。テクノロジーの進歩があれば階段も自動になって…いや、瞬間移動でいけるか。

「風太郎、愛夏ちゃんが来てるわよ」

「おはよっ、兄貴」

リビングには母さんと親戚の愛夏がいた。休日だと言うのに愛夏は制服姿である。新戸愛夏、結構遠い親せきにあたるんだが、幼少のころから住んでいる地域が同じなために小、中、そして高校共に一緒である。兄弟のいない俺の妹分だ。ちなみに、子分とかそんな感じではなく妹分（貴重な俺の妹成分）である。意味がわからない？つまりは心のよりどころみたいなもんだ。

「あれ、今日は休みだろ？」

「うん、そうだけど兄貴に制服姿を見せたかったんだよ」

じゃーんとか言ってくるりと一回転。スカートがひらひらなって可愛い。さすが俺の妹分である。
「制服姿って、入学式に一緒に写真撮っただろ？」
「違うよ、同じ学校なのに兄貴が会いに来てくれないからしっかり見てもらうために来たんだよ。なんで会いに来てくれないの？」
「そりゃまぁ、用事もないのに一年の教室には行けないだろ」
えー、ちゃんと愛夏に会うためって言う用事があるじゃん……なんて言われる前に俺は口を開く。
「お前が会いに来ればいいじゃないか」
「あ、そうか」
来てもらっても困るんだけどな。おもちゃを見つけたら絶対に喜ぶような奴が約一名、俺の近くにいる。ともかく、この場をやり過ごせたからよしとしよう。
「母さんちょっと買い物に行って来るから」
「いってらっしゃーい」
「母さん、シャンプーと歯磨き粉が無くなりそうだからよろしく」
二人で母さんを見送って俺は席に着く。
「朝まだだよね？」
「ああ」
「何か作ってあげようか？」
「頼むよ」
「りょーかい」
台所に立つ愛夏を尻目に俺はテレビのスイッチを入れる。
「そういえばさ、兄貴…とうとう加賀美生徒会長に告白して、しかも成功したんだよね？」
「ああ、何とかな」
「よかったじゃん。妹分の愛夏としてはふられるほうに賭けてたんだけど残念だったよ」
「そこは嘘でもいいから成功する方に賭けてくれよ」
偉い政治家さん達が色々と議論している。俺からしてみればどう

せどっかと癒着とかしてるんだろうと思うが、自分がもしも政治家になれた時に癒着とかを話題に持って来られるとテレビの中の政治家と同じで文句を言う事間違いないだろう。
「でもなぁ、ちょっと問題があるんだ」
「どうかしたの？」
「告白したその日に中原美奈子って言うクラスメートに告白された」
「当然断ったんだよね？」
そうだよ、世間一般的に言って普通ははっきりと断るだろう。
「あ～……適当に『友達からお願いします』ってうやむやにしておいた」
がたん、という音が聞こえてきて俺の目の前に裏返された目玉焼きが綺麗に着地した。まぁ、黄なみがつぶれちゃったけどな。
「愛夏、いつの間にかこんなにすごいスキルを身に付けたんだな。お兄ちゃん、感心しちゃったわぁ～」
血相変えた愛夏がこけそうになりながら俺の視界に入ってくる。
「あ、兄貴っ、それはまずいと思うよっ」
エプロン姿が可愛い愛夏が俺の前の席に座って失敗した目玉焼きを片づけた。
「……やっぱりまずいか？」
「そりゃそうだよっ……ばれたりしてないよね？」
「大丈夫だ。どっちにもばれたりしていないから」
しばらく愛夏は考えているようだった。
「どうするの？」
「どうするって、いや、どうにもできないから愛夏に相談してみたんだ」
「兄貴ってば変な事をよく引き起こすよねぇ。去年は下着泥棒に間違えられて女子から総スカン喰らったんだって？」
「あれは冤罪だけどな。後日ちゃんと謝ってもらったぞ」
愛夏は未だ考えているようだった。
「もう、あれだよ。どうせ加賀美生徒会長も兄貴の事を知り合いだ

から断ったら関係悪化しちゃいそうだし、仕方なく付き合ってあげてるのかもよ」
「そ、そうかなぁ」
「うーん、でも、そのクラスメートの中原美奈子って人もこれと言って取り柄のない兄貴に魅力を感じてるのかなぁ……」
「おいおい、取り柄のないって…」
「じゃあどんな感じで告白されたの？」
愛夏に言われて思い出そうと頑張ってみる。
「好きだから付き合ってほしいって感じかなぁ…」
「怪しい…もしかしたら兄貴の遺産が目当てなのかも」
「俺の家は別に裕福でもないだろ」
「いや、もしかしたら兄貴に秘めたる能力があってそれが目的で…」
「はいはい、愛夏、さっさと朝食作ってくれよ」
「はーい」
いまいち真面目にやってくれないのは俺の性格が似てしまったからだろうか。
「でもさぁ、どうするの？」
「どうするのって、そりゃやっぱり先輩優先だろ。いつかちゃんと言わないといけないことだ」
セリフだけだと格好いいけどやってる事は最低だよねぇと言われた。確かにそうだけどな、優柔不断な自分が悲しいぜ。
「兄貴がそれでいいって言うのなら愛夏も何か手伝うよ」
「おう、その時はよろしく頼む」
これまで困った時に愛夏が助けてくれると大抵失敗に終わる。しかし、くじけてはいけない。数多くの失敗を乗り越えて成功と言うものは顔を出してくれるのである。

第五話：田畑焔との友情

第五話

田畑との待ち合わせ場所に十分前到着完了。

「や、新戸」

「お前にしちゃ早かったな」

「そりゃそうだよ。だって家の前集合に変えたんだからさ」

昼飯を取っているときにメールが来た。『集合場所はあたしの自宅に変更』という内容である。

「しっかし、相変わらずおしゃれさんだな」

「身なりはちゃんとしてないと駄目なんだよ」

Tシャツジーパンの俺とはだいぶ違う。男っぽい見た目の服装の為に女子に人気の田畑焔。これは噂だが、男子の中で彼女を盗られた奴がいるとかいないとか……。

「で、俺は何をすればいいんだよ」

「実に簡単なことだよっ」

こいつの簡単は九十超えるおばあちゃんが逆立ち町内一周をするぐらいの難易度である。

「さっさと内容言ってくれよ」

「それは着くまでのお楽しみだからね」

あ〜あ、どんな事が起こるかもわからないのに安易に助けを求めたのが失敗だったな。あとちょっと待っていれば先輩が助けに来てくれて今頃デートしているはずだったのに。

デパートについて俺と田畑が向かった先は女性用下着売り場。何、田畑だって身なりは男っぽいが脱がせば女子である。ブラにぱんち〜は必要だろう。ちなみに俺一人がこの売り場に入ると女性店員から変な顔をされること間違いなし。この前なんてアマチュア作家の人が店員さんに連れて行かれていたからな。

「いや、違うんです。俺は別にそういった目的で来たわけでは……

小説に使うネタですよ～」
あれは可哀想だったな。同じ男として合掌しておいた。
「で、此処で何するんだよ？」
「決まってるよ」
びしっと右手で指差してくる。
「下着を買ってきてもらうんだっ」
「……はぁ？あのな、俺が買いに行ったら連行されるぞ」
「そこは大丈夫、ここにあたしがいるからさ」
にこやかーにそう言われる。そして親指立てて俺に言うのだった。
「がんばっ」
「ちっ、しょうがねぇな」
足取り重く、店員さんに目をつけられない様に手近な下着を手に取る。
「上下セットで頼むよ」
「へいへい」
サイズは適当でいいのか？ブラジャーとか付けたことなんて一回もないからわからんぞ。知り合いの中に標準的な人物がいるかどうか……愛夏は胸ないしなぁ、先輩は結構あるし、そういえば俺は女子と一緒に来ているんだからそいつに買えって言われているんだから基準をそいつにすればいいな。
じーっと田畑の方を見る。
「何、どうしたのさ？」
にやにやしているところをみると俺がなんで田畑の事を見ているのかわかっている節である。
「……すまん、田畑」
「失礼だよ」
「すまん、すまん……」
愛夏と変わらないぐらいだった……ええい、こうなったら適当に上下セットで買えばいいはずだ。
男らしくブラジャーを掴み、パンツもついでにあさる。

「あれ、風太郎君？」
どこかで聞いたことあるような声が耳に入ってきた。回らぬ首を無理やり回して声の主を視界にとらえる。
「な、中原さん…」
「……なんで風太郎君がブラジャー鷲掴みしてるの？」
こういう時、変に緊張したりしてはいけない。いつもと同じようにふるまえばいいのだ。
「田畑に頼まれたんだよ。下着上下セット買えってさ……あれ、いねぇ」
「田畑さんに？」
「ああ、諸々あっていわば罰ゲームってやつかな。でも、いなくなったし戻してもいいだろ…」
「あの～お客様」
「はい？」
遂にきたか……連行されたらどうなるんだろう。
「さすがにそこまで力強く握られたものを返されては困ります」
「え、あ、ああ……すみません。これ、買いますから」
愛想笑いを浮かべながらレジまで持っていく。もちろん、ぱんちーも買ったさ。ああ、着用しない女性用下着をそれはもう堂々と買ってやった。
「ママー、なんで男の人なのにぶらじゃー買ってるの？」
「よく見ておきなさい。あれが変態予備軍よ」
もう二度とこのデパートには来れないやと思いつつお金を払う。それなりに高かった……でもまぁ、中原さんが近くにいてくれたおかげで精神的に楽だった。
その後、逃げるようにその場を後にしてデパート内の飲食店に入る。本格的なコーヒーのあのお店である。
「それでその下着どうするの？風太郎君がつけるの？」
「まさか、つけるわけないよ」
「じゃあそれ、あたしにくれないかな？」

愛夏にでも上げようかと思ったが、このサイズじゃちょっと愛夏には大きいしなぁ。
「いいよ。あげる」
「お金、払おうか？」
「いや、いい。はいどうぞ」
紙袋を中原さんに渡してため息をつく。
「しっかし、田畑のやろ～どこに行ったんだろ」
「きっと急に用事が出来たんだよ」
「そうかなぁ」
「だと思うよ」
本当にそうなんだろうか、でもいないんだからその通りなんだろうな。後で聞いておくとしよう。
「この後暇なら一緒にカラオケでも行かない？」
「いいよ」
結局、この後中原さんと休日を過ごしたわけだ。悪くはなかったし、女の子とデートなんてラッキーだなと思ったさ。でもさ、やっぱり先輩とデートしたかった。

第六話：日常風景となった事

第六話

先輩と俺が恋人関係になって一カ月が経った。特に報告するような進展はなく（眼と眼があった、手と手が触れたとかそんなの）、たまに俺が先輩の仕事を手伝うくらいだ。変わった事と言えば夏服との衣替えが始まったのと、中間試験がそろそろ迫ってきているぐらいか。

「はい、風太郎君お弁当」

「ああ、ありがとう」

撤収していく中原さんに手を振っていると田畑が顔を近づけてくる。

「日常風景になったねぇー」

「そーだな」

最初の頃はちょっと悪いかなと思ったんだけど、最近じゃ何とも思わなくなってきていたりする。ちょっとやばいか？いや、別に彼女ってわけじゃないんだし、何かあったと言うわけでもない。

「新戸君、今日の日直ですから早く黒板消してください」

「わかってるよ。飯食った後じゃないと粉が飛ぶだろ」

「ちゃんと消しておけばよかったと思います」

中州に文句を言われつつ机をくっつける。

「そうだよ、全部新戸が悪いに違いないっ」

「…お前も一応日直なんだぜ」

「大丈夫、あたしはちゃんと職務を果たしたから」

「はぁ？」

「学校に来た、それが日直の仕事」

「……」

こいつに何を言っても無駄だな。

弁当箱を開けようとすると、もうひとつ机を引っ張ってくる人物

がいた。
「あたしもお邪魔します」
「中原さん…」
「一緒に食べようと思ってさ。やっぱり、食べてる人の顔もみたいかなーって思って……駄目、かな？」
ちょっとおどおどした感じがいつもと違う。
「中州君っ」
「はい？」
「わたしたちは邪魔だから、別のグループのお世話になろう」
「そうですね」
教室と言う小宇宙の中で作られた宇宙ステーションはあっという間に解体、独立して別の場所へと移って行く。俺は取り残されてしまった。
「ごめんね」
「気にしなくていいって」
「うん、じゃあ気にしない」
俺の真正面に（どうでもいい事だが目の前はいつも田畑）陣取る。ぼーっとしているのもあれなのでお弁当箱を開けた。
「あれ、今日は箸が入ってないよ」
「え？あ、あ～…ごめん。忘れちゃったみたい」
中原さんが忘れることなんて珍しい事もあるんだなぁ。箸が無いのならちょっと遠いけど食堂まで行けば借りてこられるからな。
「あ、ちょっと待って」
立ち上がった俺の腕を中原さんが掴む。
「どうしたのさ」
「えっとさ……えーっと、この前田畑さんがお弁当忘れてた事あったでしょ？」
「ああ」
約一週間前に田畑焔はお弁当を忘れ（さらに財布も忘れていた）、俺と中州から昼食を分けてもらったのである。

「あったな。それがどうかしたのか？」
「うん、風太郎君がお箸で食べさせてあげてたよね、だからあたしが食べさせてあげるよ」
「え、あ、いや～…」
一週間前、田畑の奴は弁当のふたの裏におかれたおかずをじーっと見ており、俺に目で何かを訴えていた。
「どうした、それだけあれば充分だろ？」
「うん、じゃあどうやってあたしは食べればいいのさ？」
「そりゃ箸借りてくればいいだろ」
「面倒だよ。新戸～食べさせてよ」
「……しょうがねぇなぁ」
何だか犬に餌をあげている気分になった。
ともかく、あれはもらっている側としてはすごくはずかしいのではないだろうか。
「いや、やっぱり恥ずかしいって」
「でも、あげてるときはまんざらでもない顔をしてたよ？」
「そりゃ、やっている方は何ともないだろ？」
「じゃあ、はい」
手渡されたのは箸だった。
「風太郎君があたしに食べさせてくれればいいんだよ」
「……なるほど」
さすがクラス委員長も務める中原美奈子さんである。その考えにはいたらなかった。
「あれ、いいんだ？」
「ああ、これなら別に恥ずかしくもないからな」
小さい頃は愛夏によくこうやって食べさせてやっていたもんだ。好奇心丸出しで周りが俺達の事を見て来たんだが、そんなにおかしい事をしていただろうか？
「ふぅ、ごちそうさま」
「御馳走様、弁当にお箸、ありがとう」

「いえいえ、風太郎君に喜んでもらうためにもっとお料理頑張るね」
面と向かってそう言われると恥ずかしい。いや、悪い気はしないんだけどな。しかし、ずっと弁当を作ってきてもらうのもいけないだろ。
先輩と俺は恋人で、中原さんとは友達のはずなのにやっている事はまるで恋人みたいなことである。それとも、世間一般的な友達関係ってこんな感じなのだろうか。

第七話：広がる事実

第七話

中間テストが始まり、すぐに終わった。それ以上でも以下でもない、勉強しているものはそれなりの点数を手に入れ…

「まずまずです」

「相変わらず安定して満点揃えてるな」

「ええ、努力の賜物です。次回も頑張らなくてはいけません」

勉強もせず、友人を無理やり誘って遊びに行くような愚か者にはそれ相応の点数を授けるいわば通過儀礼…

「えぇ～なんで新戸は一つも真っ赤な点数とってないのっ」

「そりゃまぁ、お前と違ってちゃんと勉強しているからな」

「だって、一緒に遊んでたじゃん」

「家に帰ってちゃんと勉強したんだぜ？くくく、まぁ、期末で頑張る事だな。じゃないと夏休みは補習漬けだ」

「ぶーっ」

「中州、こいつに勉強を教えてやったのかよ？」

「ええ、ちゃんと教えましたよ」

眼鏡をついっと上げて俺の質問に答える。

「ですが、僕の勉強方法と田畑さんの勉強方法は違ったようで受け入れてもらえなかったのです」

「だって中州君の難しいんだもん」

こりゃまたとんだ問題児である。一年の頃は隣のクラスだったからこいつの点数は知らなかったけどまさか赤点常習者だったとはな。

「今度は新戸君が教えてあげたらどうですか？」

「えぇ～俺が？」

「ええ、だって田畑さんの友達でしょう？」

「友達じゃない」

「呪ってやる。わたしは残りの人生を全部新戸風太郎の事を呪って

生き抜いてやるっ」
　まるで親の仇を見るような感じである。
「でもよぉ、俺は中州より頭悪いぜ？」
「いえ、教える程度ですから大丈夫ですよ。こういったものもやはり阿吽の呼吸が無ければいけません。この前のテニスの授業でもいかんなく発揮されていたでしょう？」
「どうだか…テニスと勉強は違うと思うけどな」
「ともかく、僕が教えたのだから今度は新戸君が教えてあげてください。友人が夏休みの補習に参加しなくてはいけないのは見ていて辛いですからね」
「じゃあ中州が教えてあげてくださりゃいいんじゃねぇのん？」
「順番ですからお願いします」
「ちぇ～」
　愛夏に勉強を教えるのならともかく、何故に同級生の勉強を見てやらねばいけないのだろうか。期末まで時間があるからいいけど、そろそろ始めないとこいつの場合はまずいんだろうなぁ。
　とりあえず放課後、中原さんに一緒に帰らないかと言われる前に（最近よく誘われる…部活があるだろうに）図書館に連れ込んだ。
「ちょ、ちょっと新戸、こんな人気のないところに連れ込んでどうする気？」
「くくく、想像に難くないだろう？」
「わ、わたしをむいてあんなことやこんなことを…」
「そうだな、とりあえず返してもらった答案用紙を全部出してもらおうか」
　アホに付き合ってやるのは一行だけである。
「日本史は自信あったんだけどね。満点かと思ったんだよ？」
　無い胸張ってどんと叩く。
「ああ、そうだな。一問ずつ上にずれていれば合計で九十六点だった」
「でしょー？」

結果論である。最後の文章問題の欄に『一問ずれとは定番ですね、次回は頑張ってください』と先生からの言葉が書かれている。
「落ち着いて解けよ」
「反省してま～す」
本当にしているのだろうか？俺がこいつの点数を心配してやる義理はないんだけどなぁ。
そのあとも悪かった答えは何処か調べ、基本から問題を解かせてみた。
そんな時、加賀美美奈子生徒会長が図書館にやってきた。
「新戸、こんなところで何をしているんだ？」
「見ての通り友達の勉強を見てやってるんです」
「ほぉ、それはいいことだな」
俺の希望は『先輩、俺と一緒に放課後期末テスト対策しましょう。わからないところ教えてください～』で色々と進展するはずなのに現実はアホとのお勉強会だからな。
「ども、新戸の親友の田畑焔っていいますっ」
解いておくようにと言った問題をやめて俺の隣にやってきていた。そして、自己紹介をして握手を求めている。
「ああ、これは丁寧にありがとう。私はこの高校の生徒会長、加賀美美奈子だ。一応、新戸の彼女でもある」
握手を満足いくまで堪能し、放した後田畑はしきりに驚いていた。そりゃそうだろうな。まさか先輩が初対面の相手に対して『彼女だ』と言うとは思いもしなかった。
「へぇ～」
「意外か？まぁ、私のような女では新戸も物足りないだろうがな」
「そんなことないです」
「ふむ、そうか…おっと、私は用事があるから失礼させてもらうよ。新戸、また今度だ」
「ええ、がんばってください」
一冊の本を掴んで図書館から出て行った。受付顔パスとかさすが

生徒会長である。
「さ、俺たちは勉強に戻ろうか。それ終わったら今日は終わりだ」
「うん、わかった…ところで新戸」
「何だよ？」
「一緒に帰ろうよ」
「ああ、いいぜ」
どうせこの後部活に行くわけでもない。部活に入ってないのだから。
たった一問の問題を解くのに数十分かかった友人をどうしたものかと思案するが答えは出ない。いっそ、家庭教師でもつけたほうが（十人ぐらいいればいいかな？）いいかもしれない。そんな結論が出たところで珍しく黙っていた田畑が話しかけてきた。
「あのさ、新戸」
「何だよ」
「あれってどういうこと？」
「あれ？あれって何だよ？」
「さっきの生徒会長が言っていた事。彼女だって言ってたけど？」
「あ、ああ、あれか。あのな、実はだ……」
俺はアホでもよくわかるように説明しておいた。
「…つまり、二股かけてるって事だよね？」
「いや、大丈夫のはずだ。まずは友達からお願いしますって言っているからな」
「……はぁ」
「何だよ…その人を馬鹿にしたようなため息は」
夕方でもそれなりに暑く、日もまだ強い。そんな最中、田畑は途中で歩を止めた。車が一台田畑、俺を追い抜いて行く
「どうしたんだよ」
「おんぶ」
「おんぶぅ？何わけのわからない事を言ってるんだよ。暑さで頭やられたんじゃねぇのか？」

両手を俺の方へと突きだしている。しかし、ちゃんとおんぶしてしまう自分が悲しい。
「あのさ、新戸。二股してるって事がどちらかにばれたらどうなるかわかってるの？」
後ろからそんな声が聞こえてくる。
「ばれるって、なんでばれるんだよ？まだばれてないぞ」
「わたしのことを適当にあしらったり、のけものにしたら今後ポイントがたまって見事満点になると…なんと…」
ポイントの溜まる方法がまるでマゾみたいである。
「何かもらえるのか？」
「中原さん、そして加賀美生徒会長に二股している事をばらします」
「……」
「新戸、おんぶして」
「してるだろ」
「うん、でも大丈夫だよ」
「何が？」
一呼吸置いてさっきよりも小さい声が聞こえてきた。
「中州君と、わたしは多分、そんな人類の屑みたいな新戸と友達でいてあげるからさ」
「そりゃどうも……しっかし、お前重いなぁ～いたっ」
「そりゃそうだよ。だって二人分の鞄持ってるんだから」
「あーはいはい、そうね、だから重いのね」
田畑が中原さんにぽろっとこぼす確率九十パー超え。辞世の句でも考えたほうがいいんじゃないかと真剣に悩んでいる俺…これが青春なんだろうか？それに、悩む事はまだあって先輩の誕生日も近いのだ。

第七話：広がる事実（後書き）

どうも作者の雨月です。長期連載をする予定は今のところありませんので適当に読んでもらうのがいいかもしれません。今回の報告は以上です。

第八話：プール掃除

第八話

五月はこれといって特徴的な事もなく（いや、田畑に二股っぽくなっていることがばれたが）、六月。

梅雨時、しかしながら体育は水泳も入ってくるわけでプールの掃除があったりするわけだ。我が羽津高校では生徒会がプール掃除を行うのが伝統だかなんだかで、俺も呼ばれていたりする。

「手伝わせてしまってすまない」

「いえ、別にいいですよ」

何せ、プール掃除を制服でするわけではないからな。うん、スクール水着とはいえ、水着である。しかも、今年の生徒会は『女の園』と呼ばれているぐらいで男子生徒は入っていないのだ。

「ふむ、そうか」

「新戸君も喜んでいるようですし、手伝ってもらいましょう会長」

加賀美生徒会長と双璧を成すと言われる浅野副生徒会長。眼鏡で、長髪にバンド、脱いだらすごいと何故だか知れ渡っている人である。

しかも…

「新戸君、ご褒美ですよ」

素晴らしい絶景を見させてくれるように胸を協調させるようなポーズをとってくれる。まぁ、サービス精神旺盛なのだ。

しかし、しかし…あれだ。隣は生徒会長なのだ。俺が現をぬかして居たら怒ったりするんじゃないだろうか？

「あれ、やっぱり彼女さんからしてもらったほうがいいのかな？普通だったらだらしない表情見せてくれるんだけど…顔色うかがっているようじゃ駄目ね」

「あ～……はは」

先輩の方を見るけど特に何とも思っていないようだった。ちょっとばっかり、さびしかったりする。

「会長」
「何だ？」
「いつも公私ともに新戸君に手伝ってもらっていますよね？」
「ああ、そうだ。そうだな、新戸？」
「え？ええ…」
いわば先輩の第三の腕と言ったところだろうか？いや、会長の下僕と言ってもいいかもしれない。
「お礼とかしてないんですか？」
「失礼だな。ちゃんと手伝ってもらったら『ありがとう』と言っているぞ」
胸を張って先輩は仁王立ちしている。手を合わせておいた。
「いや、そうじゃなくて…」
しばらく悩んでいた副生徒会長は浅野生徒会長は俺に近寄ってくる。
「な、何ですか…よからぬ事を考えている目をしてますけど」
後ずさりで逃げられる距離にも限界があり、かかとに何かが当たったところで終わってしまう。俺の顎に手を這わせ、胸を押しつけ、足を絡めてくる。
「新戸君、いつもありがとう…キスしてあげるね」
「え、えぇ～…」
いや、冗談だって言うのはわかってるんだけどな。ほら、やっぱり男って心の奥底で『いけるかも、いけるかもしれない』って思うときあるじゃん？人前ってわかっていてもやっぱり期待しちゃうもんだよ
そういえば、先輩も近くにいたんだっけか。
先輩のいる方へと視線を動かすが浅野先輩も身体を動かして見えない様にしていた。
「あら、やっぱり彼女の方が気になるの？でもね、今目に映っているのは私だけでしょ？違うかな？」
「ち、違いませんっ」

「じゃあ、目を閉じて」
「……はひぃ」
言われるままに目を閉じる俺。きっと飴ちゃんあげるからと言われただけでほいほいと暗がりに連れて行かれてしまうのだろう。
そう、俺一人だけなら確実に連れて行かれるだろうな…残念、先輩が近くにいるのだ。

「そこまでだ、そういうのはよくないぞ」
副生徒会長の後頭部を引っ張って俺を解放する。
「大丈夫か？」
「え、ええまぁ」
ちょっと惜しいかと思いつつ、そういった甘い考えが中原美奈子との間柄を未だ解消できていない要因なのだと冷静に分析してみる。
「大丈夫って、別に何もしてませんよ。ちょっとちゅうしようって思っただけです」
「校内では禁止されているだろう」
「ちょーっとぐらいいいじゃないですか」
「駄目だ。絶対に新戸には手を出すな」
「へぇ～会長がそんな事を言うのは珍しいですね～」
「当り前だ、新戸は私の彼氏だからな」
胸を張って言ってくれる先輩が神様に見えた。気のせいか、後光まで見えたりする。
「じゃあ会長のいただきますっ」
「む、むぐぐ……」
何と、あろうことか目の前で先輩の唇が副生徒会長に奪われてしまった。そのまま先輩はぺたんと尻もちをついて副生徒会長に押し倒され……
「ぷっつはぁ～……御馳走様でした」
「お、女の子同士で…」

ゆらりと立ち上がる副生徒会長。先輩は放心状態で青空を眺めていた。ファーストキッスが奪われたわけだが、なんだか微妙な心境である。
「さぁて、次は新戸君の初めてをもらっちゃおうかなぁ？」
先輩を心配している場合ではなかった。口元を歪め、両手を顔の横でいやらしく動かしている。

こ、このままここにいると……やられるっ……いや、むしろ掘られるかもしれん。

「待てぇえ～」
「ひぃぃぃぃーっ」
デッキブラシを振り回しながら追いかけてくる副生徒会長。俺は他の生徒会員を間を抜けたりして逃げ回った。
その後、復活した生徒会長に仲良くゲンコをもらって説教され、大人しく掃除を終えたりする。最後の後片付けは俺と先輩で終わらせ、プールサイドでちょっと話をすることにした。
「ふぃー、疲れましたね」
ふぃー、副生徒会長につかまって突かれなくてよかったわ、いや、まじで。
「新戸」
「はい？」
「その、色々とすまない」
「…ああ、副生徒会長の事ですか。いいですよ、それなりに楽しかったですし」
「いや、これまでのお礼の事だ」
「お礼…ですか？」
「そうだ。言葉だけで事足りると思っていたのは長い付き合いだか

らかもしれない」
「副生徒会長の言っていた事を気にしているですか？俺は別に気にしていませんけど」
　むしろ先輩の方があんな人前で押し倒されて濃厚なキッスされるとか精神的にくるんじゃないだろうか？考えてみてほしい…同性にいきなり押し倒されて唇を奪われるとか二度と校門をまたぐ事はないだろう。
「お礼をしたいと思う」
「お礼ですか？」
「ああ、浅野がお礼だと言っていた事をしようと思うんだ」
「え、えーと…」
　もしかしてキス…いや、そうに違いない。
　期待した目で先輩を見たけど、両手を振りたくって顔で思いっきり否定していた。
「違うぞっ、ポーズの方だ」
「ポーズ…ですか？」
「あ、ああ…ほら、男子はそういったポーズをとってもらうのが好きなようだからな。よく浅野は男子生徒の前でポーズをとっている。新戸はどんなポーズをしてもらいたいんだ？」
　いきなりそう言われたって困る。いや、キスの心の準備をしていたのにそれは困る。まぁ、そんな事だろうとは思ってたさ。うん、先輩が俺に悩殺ポーズをとってくれるなんて今後あり得ないだろうからな。
　でも、品行方正な先輩がポーズをとったところでぎこちない感じで（それはそれでいいけどさ）俺の方が申し訳なくなっちまうよ。
「…気持ちだけで十分です。じゃ、俺は帰りますんで…お疲れさまでした～」
　浅野副生徒会長のポーズはマジですごかった。背筋をぴんと張らせるような感じだったし、猫背も一発で直るぐらいの凄さだったのである。あれを見た後ではどれも駄目に見えてしまうだろう。

帰ろうとした俺の腕を先輩が掴んでいた。抱きつくような感じで。
「待ってくれっ、つまり新戸は私に女としての魅力がないと言いたいんだな？」
「いや、そうとは言ってませんよ。十分すぎますって」
殺傷能力を持っていそうな胸とかな。ま、それとこれとは話が別だ。
「気が済まないからお願いだ、何か指示してくれ」
「……わかりました。でもどんなに恥ずかしいポーズでやってくださいよ？」
「ああ、もちろんだ。絶対に成し遂げて見せる」
少々、心苦しいが此処まできたら手加減と言う奴は逆に失礼である。俺は先輩の身体を触りながら指定したポーズをすぐに完成させた。
「こ、こうか？」
「そう、そうです。多分、先輩のそのポーズを見る事が出来るのは彼氏である俺ぐらいなものです。みた人を釘づけにします」
品行方正な先輩がまさか『シェー』のポーズをするわけがない。先輩が二度とシェーをすることもないだろう。
俺は先輩の恥ずかしいポーズをしっかりと目に焼き付けておいた。

第九話：波乱の回避

第九話

今ではかなりの数が普及された携帯電話。中学生だって持っているし、小学生の中にも所有している子もいる。もちろん、高校生の俺も持っているし、大抵の生徒が持っており、学校に持ってきているだろう。

ただまぁ、前提と言うか、『教師の見ている前では使用してはいけない』、『使用が許されている場所だけでの使用』といったものが決められている。通話がしていい場所は職員室を抜けたベランダ、屋上（立ち入り禁止となっている）の二か所だけだ。

ルールが守られなかったらどうなるか？決まっている…罰を受けるのだ。

「新戸、生徒会室では使用厳禁だ」

「え」

「没収だ。反省文を書いてこい」

たとえ知り合いと言えど、彼氏と言えど、手加減するつもりは毛ほどもなかったようで俺から携帯電話を取り上げた。ちょっと気を許しすぎたかもしれないと思って大人しく引き下がり、反省文を書く為に紙をもらったわけだ。

「私の彼氏だからな。一枚増やしてやろう」

「……ありがとうございます」

全く、嬉しくない。

六月の中盤、俺は携帯電話を数日間使用不可にされたわけだ。使用不可にされた事に腹を立て、親が学校に乗り込んでくるとか冗談にも程がある。

「それは風太郎が悪いんでしょ？はやく反省文を書きなさい」

「へーい」

夕食時でも母ちゃんにそう言われた。そりゃそうだろう、学校の

事に親が関わってくるなんて後ろ指さされるレベルである。モンスターペアレンツの友人なんて誰ももちたくないだろうからなぁ…中学の頃そういった奴がいたけど、ものの見事に隔離されてたな。
家で反省文を書くが、書き終わらずに学校で書くことにした。
「……まぁ、特にメールとか送ってくる奴がいるわけでもないか」
ここ最近、電話もメールも母ちゃんからが多い。先輩とは恋人のはずだが、携帯での関係は必要事項のみという何とも素っ気ないものだったりする。一応、先輩にも言い分はあるようで『気持ちが伝わらないだろう』との事である。
朝のＨＲが始まるまでに書き終えようとするも、埋まらない。
「新戸おっはよ～」
「おはよう」
元気の塊みたいな奴が入ってきた。反省文を指差しながら薄っぺらい鞄を自分の机の上に放り投げてこっちに近寄ってくる。
「あれ、ケータイ取り上げられたんだ？」
「ああ、先輩にな」
「先輩……生徒会長さんかぁ。相手が新戸と言えど、手加減しないんだねぇ…でも当然か」
「なんで当然なんだよ？」
「やっぱりきっちりして欲しいと思うよ。新戸なら尚更ね」
「……そうかもなぁ、ちょっと気が緩んでたわ」
「で、どんな事書いてるの？見せて見せてっ」
「ほら」
使用した事を素直に悪いと認めた文章が続いているだけである。受理されなかった場合はボランティア活動に参加せねばならない為に一発で合格を目指さなくてはいけないのだ。別に活動に参加してもいいけどな。
「面白くないね」
「反省文が面白かったら問題だろ」
「うーん、そうだね。でもこう書いておくといいよ……ほら、こん

な感じ」
　しょっちゅう取り上げられていそうなイメージがある為に反省文は自信あるんだろうかと見せてもらった。
「……『社会が悪い』って絶対に駄目だろ」
「そうかなぁ、学校が悪い、ひいては生徒会長が悪いんだって言えば嫌われるだろうし」
「嫌われちゃ駄目だろっ」
「いいじゃん。二人もいるんだからさ～、一人ぐらい失っても」
「本命は先輩だから絶対に駄目だ。ったく、邪魔しやがって…」
　社会が悪いと言う文字を消していると中州が入ってくる。
「おや、携帯電話を取り上げられたのですか？」
「そうだよ、反省文書いてるんだ」
「どれどれ……これならすぐに返ってきそうですね」
「そっか、お前に言われるとほっとするよ。どっかのアホと違ってな」
「むっ、わたしは別に間違ってないもんっ」
　いきなり黒板前に移動し、教壇を両手で叩いた。
「皆の者っ、携帯電話を別に授業中に扱ったぐらいで取り上げられるこんな校則、我々の手で買えようではないか～」
「ん、何だ何だ？」
「また田畑のアホが騒ぎだしたようだな」
　クラスメートからもアホ扱いとは…可哀想な奴だ。
　いつものように騒いで終わりだろうかと思ったらそうでもないようでみんな田畑の言葉に耳を貸していた。
「そうだよなぁ、確かにおかしいもんな」
「別に休憩時間とかちょっと触ってもいいよなぁ」
「この学校に革命を、わたしとともに、みんなで起こそうじゃあないかっ」
「おー」
「ありがとう、ありがとうございます。田畑焔はみんなの住みよい

学校へ変えようと思っています」
「いいぞ～」
「もっとやれ～」
盛り上がっている中、俺の反省文は何とか完成した。アホに構っていなくてよかったからかもしれないし、中州がアドバイスしてくれたからかもしれない。そして、とある声が発せられたところでこの集会は一気に静まり返った。
「ちょっと、何の騒ぎ？」
クラス委員長である中原美奈子の声だった。俺に対しては優しいが、こういったことに関しては厳しい。教師から『このクラスは静かで、教えやすい』と言われるのも全てこの中原美奈子のおかげなのだ。きっといなかったら暴れん坊クラスの名をほしいままにしていた事だろう。
「お腹が急に痛くなったでござる。急性お腹Ｐごろろでござるよ」
「おお、お主もか。拙者もでござる。なかなかきわどい状態でござる」
「では共に参ろうか？」
「拙者もついて行くでござる」
「では皆で厠に参ろうか？」
「そうするでござる」
男子のほとんどが中原さんに睨まれながら出て行ってしまう。
「田畑さん、こういう事はあまりしない方がいいよ」
「え～なんで？」
「いずれ休憩時間だけじゃなく、授業中に使う生徒が必ず出るわ。だから駄目」
「ちぇ～、校則変えたら新戸が喜ぶと思ったんだけどな」
「それはなんでそう思うのかな？」
「新戸、携帯取り上げられちゃったんだよ」
田畑がそう言うと話をやめてこっちにやってくる。
「風太郎君が田畑さんにそういったの？」

「え？何が？」

中原さんの手が動いたのも一瞬、そして俺の頬がいい音たてて突っ張られたのは一瞬の出来事だった。

「ちょ、ちょっと新戸に何するのっ」

田畑が食ってかかるけど、あっさりと押しのけられて『あ～れ～』とか言いながら飛ばされていった。

「…風太郎君、あたしは普通の学校生活が送りたいのっ、その邪魔をしないで」

すっごい迫力である。逆らったらすーっと持ち上げられて爆破されそうだった。

「え、あ、ああ…悪かった」

「わかってくれたのならいいよ。許してあげる」

中州なんていつの間にか隅っこの方に逃げておびえているし、他の女子もびっくりしているようだった。

中原さんはそのまま鞄を持って自分の席に着席。いやーな空気が流れ始めたので俺は教室を出ることにした。

「新戸ぉ～じつによき響きでござる」

「イライラがすかっと消えたでござるよ」

「新戸のおかげでござる」

「ござるござる」

「いや、俺がぶたれたんだが？」

「ぶたれるのは誰でもよかったでござる」

「どうでござるか？彼女にぶたれた感じは？」

何だこの御座る口調は？

「あのなぁ、あの一撃は迷いのひとかけらもなかっただろう？」

「確かに痛快でござった」

「そうでござろう？つまり、拙者の事よりも校則の方が大切と言うのがありありと言うことでござる」
「その通りでござるな。つまり、貴殿は彼氏ではなく、校則の方が彼氏と言う事で間違っておらぬということでござるか」
「その通りでござる。つまりは、中原美奈子殿と拙者の間柄は不良に切れるクラス委員長という構図だったと言うわけでござるよ」
まずは外堀から埋めて行く事としよう。俺と中原さんの仲をなかったことにするには少々時間がかかるかもしれないがこういった偶然を積み重ねて行ってゴールに向かうしかない。
意外と早い段階で無かった事に出来るかもしれないと思った俺は浅はかだったのかもしれない。
俺がぶたれたその日の一時間目休み時間。俺は中原さんに連れだされていた。
彼女は泣いていた。
「本当、本当にごめん。風太郎君の事をぶとうなんて思わなかったんだ。でも、あたし、クラス委員長だからクラスの皆のために率先して悪い事をしようとしている人を止めないといけないから…だから、だから…怒らないで？」
うわー、どうするよこれ。すっごく面倒なことになったんじゃないのかしら？
「は、はは、別に怒ってないから気にしなくていいよ。じゃ、俺、教室に戻るから」
逃げようとした俺の腕を掴む。まだ何か言いたい事があるらしい。
「今度はど～したの？」
「お願いだから、他のみんなに変な事を言わないで、もう、ぐずっ…あまり友達もできなくて風太郎君に嫌われたらあたし、どうすればいいのか……」
「あ、うん、ご、ごめんねぇ」
まさか男子との会話が聞かれていたとは…いや、声高らかに最後の方は『よきにはからえ、がははは』ってやってたからな。そりゃ

誰でも聞こえるか。
「……そういえば、風太郎君に昨日の夜電話したんだ」
「え？」
「そうしたら生徒会長が出て、びっくりしたよ。驚いてきっちゃって…本当に、びっくりしたよ…あ、ごめん、ネクタイ曲がっちゃったね」
別にネクタイは曲がっていなかった。だけど、中原さんはそれを正してくれて……ちょっときつめに絞めてくれた
「あ、ごめん、つい力がこもっちゃって」
「あ、いいよいいよ…」
「じゃ、あたしもう行くね」
すぐさま笑顔になって行ってしまった中原さん。なんとなく、嘘泣きしていたんじゃないかと思ってしまった。

第十話：別れるための第一歩

第十話

プールの底が綺麗に見えるのも数週間程度だろう。再びプール掃除がやってくるんだろうが、この苦労はあまり知られていないらしい。

今年初めての授業での水泳。スクール水着に各々着替え、男子は女子側の方をちらちらと見たりする。

「どう？どう？わたしってば魅力的？」

男子の中に女子が一人まぎれているんだけどな。誰も田畑の事は見ておらず、先生が来ていない間に見ているようであった。

「これぞ夏でござるな」

「そうでござる」

また御座る共が沸いていた。

沸いた侍ども（もしくは忍者か？）を無視して俺は一生懸命無駄なポーズをしている田畑の肩に手を置いてため息をついた。

「……田畑君、私は実に残念だ。何せ、君に無慈悲な言葉を投げかけねばならないのだから。ああ、誤解しないでほしいのだが、これは決して君の事が憎いとか、嫌いだとかそういった感情一切ぬきの真摯な言葉だから受け止めてほしい。残念な身体だ。うん……いたぁっ、なんで殴るんだよっ」

「そこは嘘でもいいから『あ～はいはい、すごく魅力的な身体だよ』っていってくれればいいじゃん。逆に傷つくよっ」

投げやりでもいいのなら始めっからそう答えてやればよかった。

「でもまぁ、僕から見ても残念……ぐはっ」

「中州君ってばいつの間に新戸っぽい思考回路になったのかな～」

フェンスに中州を押しつけてぐりぐりやっている。可哀想に……中州、俺の為に犠牲になってくれてありがとう。君の尊い自己犠牲は一分程度俺の脳みそに書き込んでおくよ。

「風太郎君っ」
馬鹿を眺めていたら声をかけられた。後ろに控える男子生徒どもが感嘆のため息をもらしていた。
「はいはいどうしたの？」
俺の目の前には中原さんがいた。当然、水着姿だ。それなりのプロポーション（俺の基準が副生徒会長の為に世間一般的にはかなり大きい方だと思う）で、実に健康的だった。
「ど、どうかな？水着、似合ってる？」
スクール水着に似合う、似合わないなんて存在しないと思うんだ。
「あー、似合う似合う、すっごく似合ってるよ」
「そっか、よかったぁ…じゃ、またあとでね」
「はーい、またあとでね～」
「ばいばーい」
田畑も何故か手を振っていた。男子と女子は別に授業を受けるんだけどな。
「ほら、お前ら集まれ、授業を始めるぞ～」
先生も何か言ってやってくれればいいのに一切触れない。
「じゃ、お手本は田畑がやってくれ」
「了解ですっ」
そして、お手本を田畑にやらせるとは……。
俺はある程度泳いでからプールに上がり、先生に言う事にした。
「あの～先生」
「どうした？足でもつったのか？」
「いや、なんで田畑がこっちにいるんですか？」
「それは授業を受ける為だろう。それ以外に何があるんだ？」
「あ、いや、そうじゃなくて…女子はあっちでやっているじゃないですか」
そう言うと俺の肩を先生が力強く握った。
「いいか、新戸」
「はい？」

「男女差別はよくないぞ。今は平等の時代だからな。田畑はお前と仲がいいし、スポーツは全体的に得意だ。うん、お前よりな」
「何気にひどいっすね」
「そう怒るな。人間には得手不得手と言うものがあるんだよ。そんな十人十色の友達と一緒に汗を流す、これこそまさに青春じゃあないか。さぁ、一緒に汗をかこうっ」
もはや何を言っても無駄のようだ。俺は大人しくクロールの列に加わることにした。
最初と言う事もあってか基本的に自由のようだった。先生はプールサイドで腕立てしているし、泳ぐのに疲れた連中は先生の近くで腕立てするふりをして女子のほうをちらちらと見ている。
「はぁ～……」
俺はプールサイドの淵に座り込んでぼーっと水面を眺めていた。
「元気ないねぇ～」
田畑が寄ってきて俺のすぐ隣に座る。中州もおまけで付いてきたようだが、他の男子生徒につかまってプールの中に放り込まれて遊ばれている。
「どうかしたの？まさかばれたとか？」
「いや、ばれてもないけどさ…つーか、別にそっちの話で疲れてるわけじゃないって」
「へぇー、てっきりそれだと思ったよ。他に悩み事なんてなさそうだし」
「まぁ、悔しいけどそうだな。これからどうしようかなって思ってんだよ」
「え、何が？」
頭の中で簡単に説明できるようまとめる。もちろん、他の連中に聞かれない様に注意して話すことにしている。
「…波風立たせることなく終わらせたいんだよ」
「ん～それは虫がよすぎるだろうけどね。でもさ、それを成し遂げたいのならわたし、協力するよ？」

「ん、ああ……ありがとう」
「というわけで、まずは相手の事を知ることから始めたほうがいいんじゃないのかな？」
「開いての事を知る…か。なるほどな」
「田畑ー、中州が足つったらしいから保健室に連れて行ってやってくれ～」
先生の危機感の薄い声が聞こえてくる。どうもプールサイドでいきなり足をつったらしい。
「はいは～い。じゃ、わたしいくね」
「ああ」
相手の事を知る事から始めるか……。
女子の方へと視線を移すと気のせいか、中原さんと目があった……やっぱり気のせいかな。

第十話：別れるための第一歩（後書き）

別に記念すべきってわけじゃありませんが十話目です。この小説、書いててハッピーエンド出来そうにないんですけどどうしたらいいんでしょうねぇ。文字打ってて頭の中で勝手に話が進むのですがどうもちょっと暗い話になりそうで怖い怖い。読んで後悔した小説第一位でも目指しますかね。

第十一話：見られている気がするだけ

第十一話

天気予報じゃ雨が降るなんて言わなかったはずだ。おかげで傘を持って行っておらず、帰りはひどく濡れてしまった。相合傘をしてくれる相手はいるにはいる……ま、先輩は生徒会で遅くなるし、結構早い段階で分かれ道に来てしまうからあまり意味がない。

中原さんも用事があるようで何も言っていない俺に謝りに来た。朝に真っ赤な目立つ傘を持ってきていたのは既に確認済みである。

一応、田畑と帰りが一緒になったから恥を忍んでお願いしたところ

「しょうがないなぁ～けど、新戸のお願いだからねぇ」

等といいつつも傘を広げてくれた。

開いた瞬間、田畑の傘の上部分はすぽんと取れて風にあおられ飛んで行ってしまったのだ。

「……あ、相合傘する？」

「その銀のステッキじゃ出来んだろ」

「新戸、青春って言うものは雨に打たれるのが最高なんだよっ」

「お前の頭が雨に打たれてよくなるといいな」

後日、飛んで行った傘の上部分がお地蔵さんの頭の上に無事着陸しているのはまた別の話である。

田畑と共に文句を言いつつ俺は家に帰りついたと言うわけだ。当然、家に帰りついたらお風呂に入ることにする。シャワーでもよかったんだけど、やっぱり全身濡れちゃうからな。少し冷えた身体を温めたいわけよ。

風呂から上がってパンツを装着。そのまま自室へと行こうとしたら愛夏がいた。

「お、来てたのか？」

「うん、今日お母さん達帰ってくるの結構遅いし、雨でぬれちゃったからシャワー借りようと思ってさ」

「そうかそうか、風呂という選択肢もあるからな」
「うん、わかった」
一応愛夏の部屋のようなものもある為に着替えに関しては問題ない。その点に関しては問題ないけど、パンツ一丁の男を見て何とも言わないのは問題があると思う。
脱衣所へと向かう愛夏を呼び止め、少しばかり説教する事にした。服は着たのかって？パンツは立派な服だから大丈夫だろ。
「愛夏、ちょっとそこに座りなさい」
「何？濡れてるんだから早くしてね」
「ああ。愛夏、お前もお年頃の女の子だ。親戚とはいえ、俺のパンツ一丁の姿を見て少しぐらいは騒いだほうがいいぞ。高校生の頃から達観した態度はいかがなもんかと思うんだ」
「じゃあ兄貴、パンツ脱いでよ。さすがに脱いだら騒ぐからさ」
待て、なんで右手に携帯電話をカメラモードで待機してるんだ？そしてなんで笑ってるんだよっ。
「じゃ、愛夏はお風呂に入ってくるからね。あ、そうそう…」
言い忘れていたと言わんばかりの態度だった。
「……やっぱり、愛夏から言わせてもらえば別れたほうがいいと思うよ」
「そうか」
「うん、それと……」
歯切れが悪いと言うか、何と言うか……去り際に残したのは実に信じがたい言葉だった。
「出来れば、生徒会長とも…」
ただ、この言葉は微妙に聞きとれなかった為にもしかしたら『出来れば　Ｓａｉｎｔ　Ａｎｄ　Ｋｉｎｄ』と愛夏がいった恐れもある。意味なんてわからんけどな。
愛夏があがってくるまで暇だったので携帯電話が光っていたのでメールの相手をすることにした。登録した事のないようなところからのメルマガや『二十七歳の人妻ですが…』なんてメールが多量に

来るために迷惑メール対策を一応はしている。
今回のメールをしてきていたのは中原さん。内容は…
「……お風呂どうだった？……か」
あの人、俺の私生活でも覗けてるんじゃないだろうか。いやいや、そんな事はあり得ないだろうからな。雨降っていたし、こりゃ家に帰ってお風呂に入ろうかしらとか言ってたからそれで予想しただけだろ。
中原さんに『うん、よかったよ』と送ったところすぐに返信が…
『そっか、いいね。あたしも入りに行こうかな。ところで、今あたしは“何”をしているでしょう？』
そんな内容のものだった。
何をしているのか？息してるじゃないの……なんて送ったら馬鹿にされるか。真面目に考えたっていい答えは思い浮かばないので、中原さんのメールをまねることにした。
「シャワーを浴びている……で、いいか」
メールが一分程度で返ってくる。
『正確にはシャワーを浴びながら・・・・してる。また学校で』
「何してるんだろ」
結局詳しい事は謎のまま。
「兄貴、あがったよ」
「おう……って、こら、なんで下着姿で出てくるんだよ？」
「未だパンツ一丁の兄貴が言っても説得力無いよ」
「俺はいいの。ほら、服着せてあげるからこっちに来なさいっ」
愛夏に服を着せ、その後は制服の乾燥を行った。お風呂に入る前に愛夏が言っていた事を聞いてみたけど教えてくれず、メールの事もあって変に想像してしまう。ほんの少しだけ中原さんがどういった人間か知りたくなった。いや、表面じゃなくて裏の方ね。怒ったりしたら素の顔が出るだろうし……。

第十二話：夏祭り一日目

第十二話

幸か不幸か、期末テストのちょっと前に三日間夏祭りが行われる。確か、恨みの神様を祭っていたんだっけか？うーん、まぁ、疫病神的扱いだったらしいけど、茉莉を行う事によって神様の心を癒したとかなんとか。

「今日から夏祭りだよね」

いつの間にか昼のメンバーに中原さんが加わっている。その事に文句を言う他の二人（田畑は無表情、そして中州も無表情）でもなく、ただ淡々と昼飯を食べている。

「ん、そうだなぁ」

「風太郎君、一緒に行かない？期末までほんのちょっと時間あるから」

「そうだな、行こうかな」

「そっか、よかったぁ…」

「田畑はどうだ？」

「え、あ～…わたしはいいよ。だって、期末は頑張らないといけないから」

どこだか遠いところを見ているようだった。

「そうか。って、俺が教えないといけないんだったな。悪いな、中原さん」

嫌そうな顔をしているようにも見える。見えるけどしょうがないといった感じだった。

「僕が引き受けますよ」

それまで黙っていた中州がそういった。

「え？中州が俺の代わりに中原さんと一緒に夏祭りに行くのか？」

「違いますよ。僕が代わりに田畑さんに勉強を教えるんです」

「なるほどなぁ」

「というわけで田畑さん」
「何？」
「お昼も食べ終わった事ですし、早速図書館に向かいましょう」
あんな小さな体にどんなパワーを秘めているんだろう。いやがる田畑を引っ張って連れて行ってしまった。
「えーと……」
「うん？」
「学校の帰りにすぐに行けばいいのか？」
「それはまずいよ。学校帰りに寄ったりしたらいけないんだからさ」
こんなときでも真面目である。
「学校終わって、着替えて校門前に集合でどうかな？」
「それでいいよ」
「じゃ、あたし用事があるからちょっと行って来るね」
「ああ」
中原さんが教室から出て行くとクラスの男子が俺を囲む。
「時が経つのは早いでござるな」
「気が付いたら夏、そして夏祭りイベントでござったか」
「羨ましいでござるっ。圧倒的、絶対的に羨ましい存在でござるよっ」
「他の男子全員には厳しいでござるがそれでもやはり、このクラスのアイドルでござるよ」
「ござるござる」
こいつらは何がしたいんだろうか。首をひねったところで答えは出ず、無駄な時間を過ごしているようにしか思えなかった。
午後から中原さんは絶好調のようであった。頻繁に手を上げ黒板に問題を解いたり、英文法を一人で全訳したりと先生も少し驚いていた。掃除時間もその効果は持続していたようで一緒に掃除していた女子は『まるで三人いるように見えた』と語っている。
帰りＨＲもあっさりと終わり放課後。
「じゃ、着替えたらすぐに校門前に立ってるから」

「わかった」
嵐のように去って行った。
「新戸、帰ろ～」
「ああ」
中州と田畑と共に校門を後にする。
「新戸と夏祭り行って楽しいのかなぁ」
「世の中、もの好きと呼ばれる方はいますからね」
「お前ら失礼だな。でもまぁ、それは否定できないか」
恋は盲目って奴だろうか。俺も先輩と一緒に夏祭りとか行けたらあんな感じになっちゃうんだろうね。
「新戸君、頑張ってください」
「おう」
「またね～」
分かれ道で中州と別れ、田畑が残る。
「新戸と夏祭りかぁ～楽しいのかなぁ」
「あのなぁ、そこまで疑問視する事なのかよ」
「うーん、ほら、中原さんってすっごく真面目で間違えたりしないけど、新戸の事になると間違えそうだなって、ちょっと、周りが見えない時があるからさ」
「それは……どうだろうな」
「ともかく、わたしは期末の勉強があるからね。明日以降、わたしたちの前じゃ夏祭りの思い出なんて言わなくていいから」
「ああ、それは注意しておく。それと、明日から覚悟しておくことだな……くくく……中州以上に張り切ってお前を教えてやるからな」
「それは望むところだよっ」
明後日ぐらいにはへばっている田畑の姿が容易に想像できるのは何故だろうか。しかし、友人は時として鬼にならねばいけないのだ。
家に帰りついてさっさと準備をする。女の子を待たせるのはいけないことだとテレビで誰かが言っていた。一応、身だしなみの為に鏡の前に立ってみたけど、かっこいいとはいえない顔が映される。

「…確かに、物好きかもなぁ」
くしで髪を押さえつけてみたけどいまいち決まらない。しょうがないのでそのまま出ることにした。
「中原さん…」
「よかった、ちょうどチャイム押すところだったんだ」
玄関からでて少し先に中原さんの姿があった。淡いピンクの浴衣で、お祭りムード漂う姿である。
「どうかな？似合ってる？」
「うん、いいんじゃないかな」
「じゃ、行こうか？」
道中、雑談をしながらちらっと盗み見る。なるほど、確かに男子に人気があるっていうのはわかる気がするなぁ。
「ん、どうかしたの？」
「え、ああいや…別に何でもないよ」
「見とれてたとか？」
「いや、違うけど…」
「そこは嘘でもいいから頷いてほしかったかな」
「うん、すっごく見とれてたよ」
中原さんにため息交じりで首を振られてしまった。ただ、その表情は嬉しそうである。
お祭り会場についてお賽銭を放り込む。なんか罰当たりな表現だけど、事実だ。何かお願い事でもしてみるかと考えてみる……そういえば、俺って中原さんと別れたいって願わないといけないんだよな。
再び、中原さんを盗み見る。彼女は一生懸命お願い事をしているようだった。直接的に『中原さんと別れたい』とか叶うものなのだろうか？そう言った後ろ向きのお願い事は身の破滅を呼びそうだし、ポジティブな願い事をしておくことにしよう。
『……先輩と仲良くなれますように、先輩と仲良くなれますように……』

しかし、いつから俺は他力本願な人間になってしまったのだろう。人間って神様に頼ってばっかりじゃあないか……でもまぁ、それでも願い事が叶えばたなぼたである。

その後は軽く二周ほど屋台を周る。時折きょろきょろと中原さんは辺りを見渡していたのでくじ屋の前で尋ねることにした。

「誰か探してるのか？もしかして彼氏？」

「ううん、そうじゃないよ。周りカップルばっかりだな～って思ってね」

言われて辺りを見渡すと中原さんの言うとおりだった。いちゃいちゃしまくりやがって目に毒だ。俺も先輩といちゃいちゃしながらお祭りを楽しみたい。

「周りから見たらあたしたちもあんな風に見えるのかな？」

「客観的な意見を言わせてもらうとそうだと思われます。何せ、辺りの男女のペアは実に親密な態度をお互いがとっており、なにより仲良くなければ二人組でこないでしょう」

「そっか、よかった」

俺の渾身のボケは見事にスルーされてしまった。さらに、さっきの言葉が引き金になったのか俺の腕に手を回してきたのだ。

「あのさ、あたしの立ち位置って風太郎君の中ではちゃんと友達からちょっとくらい進展してる……よね？」

「あ～…どうだろ」

こんな曖昧な言葉じゃやっぱり怒るだろうか？頬を掻きながら隣の中原さんを見る。いつも通りのようでほっとした。

「うーん、そっか。じゃあ頑張らないといけないんだねっ。だからさ、今日だけ腕組んでもいいよね？」

「う、うん」

遠慮なく俺の腕に胸を押し当ててくる。なんだかどんどん沼地に足を取られている気がしてならない。こういうところを先輩に見られたらどうなるんだろうか？

そういえば、学校の近くって言う事もあってちょっと遅くなると

先生たちがうろつきはじめるんだったな。ま、隣にいるのは真面目なクラス委員長だからあんまり遅くなる事もないだろう。
「風太郎君、あっちに焼きそばが売ってるよっ」
「よーし、じゃああれで晩御飯の代わりにしようか」
そんな感じで俺は普通に中原さんとの夏祭りを楽しんでしまった。
帰り道、俺はどんな願い事をしたのか中原さんに聞いてみたのだが……
「風太郎君には絶対に教えられないよ」
と言う事であった。

第十三話：夏祭り二日目の思いで

第十三話

中原さんと一緒に夏祭りに行った次の日の昼休み。

「風太郎君と行った夏祭り、すっごく楽しかったよ」

「そうですか、それはよかったですね」

中原さんの話を聞いているのは中須ただ一人。田畑と俺はもう何度目かわからないその話題に正直疲れてきているのだ。

「すごいね」

熱弁している中原さんを見ながらどうでもよさげに田畑がつぶやく。

「ああ、正直中州があそこまで耐えているのは驚きだ」

「もう七回目だよ」

「そんなに少ないのか？二桁はいってるって思ったんだけど」

「一回が長いし、面倒に感じることほどそんなもんだよ…」

箸をかじりながら田畑はこっちをじーっとみている。

「なんだよ？」

「ん、いやさぁ、よかったじゃん。また仲良くなれたみたいで」

「……多分、今日行っていたらもっと熱弁をふるっていただろうな」

「ん、ああ、そっか。確かにそうだね今日の方が思い出に残るって思ったけどなぁ……で、どうするの？」

「どうするって…何の事だよ」

「とぼけちゃって」

人差し指と中指を立てる…つまりはVサイン。それを逆さまにする……つまりは二股。

「ど、どうするって…」

「最低最悪でなし」

ばっさり切り捨てられる。事実だ、そうなんだけど反論したくなったりする。

俺が何か言い返せないかと考えていると放送をつげるチャイムが鳴り響いた。
『二年生の新戸風太郎君、至急生徒会室までお願いします。繰り返し放送します…二年…』
田畑がさっきよりも険しい顔をしている。
「あのさ、もしかしてばれたんじゃないの？」
「ば、ばれたってなにが？」
「うん、何がばれたの？」
いつの間にか中原さんまで会話に参加してきているようだ。
「それはともかく新戸、早く行ってきなよ」
「そうですよ」
「あ、ああ…」
中州、田畑のおかげで中原さんに詳しく突っ込まれる前に教室を後にする事が出来た。
生徒会室までやってきてさっきの田畑の言葉が思い出される。

『あのさ、もしかしてばれたんじゃないの？』

夏祭りだったしな。真面目君が帰るにはちょっと遅い時間だったからな。視界の端に生徒会っぽい人がいたような気がしないでもない。
未だ扉は開かれていない生徒会室。中では誰が待っているのか非常に気になる、気になるんだけどとりあえず開けないとまずいだろう。
「し、失礼しま～す…」
どうせ先輩が俺に用事で呼んだだけだろう。そう思って足を踏み入れる。
「はぁ～い、新戸君」

「浅野先輩…」
バンドでまとめられた長髪で眼鏡、浅野副生徒会長が机に足を組んで座っていた。足は椅子の背もたれに乗せられている。
「あの、浅野先輩が俺を呼んだんですか？先輩…えーっと、加賀美先輩じゃないんですか？」
「今ちょっとトイレに行ってるわ」
「あ、そうなんですか」
ちょっとだけ寿命が延びた気がした。
「あ、そうそう、見ちゃったの」
「み、見ちゃった？」
「うん、そう」
足を組みなおす。生徒会に入っている癖に短いスカートとかなんで何だろう。ああ、いかん。そっちに視線をもっていってはいけない…。
浅野先輩を睨むように顔を上げる。
「あら、そんなに怖い顔しなくたっていいじゃない」
「別にしてませんよ」
「まぁ、いいわ」
先輩は立ち上がって俺に近づき、人差し指で顎を触る。
「昨日の事、黙っておいてあげるわ。ま、どうしようもない状況に陥っているとは思うけどさ…」
まるで悪魔のような微笑み方だった。
「悪い事をしている人間は遅かれ早かれ酷い目に会うのが道理よ。気をつけなさい」
「……」
浅野副生徒会長はそれだけ言うと生徒会室から出て行ってしまった。
それから少し経って先輩が入ってきた。
「新戸、すまない。言い訳になってしまうが放送の後、浅野が私の髪にケチャップを間違えてこぼしてしまったんだ。さすがにまずい

だろうと思って洗ってきた……ん、どうした？顔色が悪いぞ」
「あ、いや…そんなことないです。ところで俺を呼び出した理由は何ですか？」
「ああ、そうだったな。実は今日の放課後、また手伝ってもらいたい事がある」
「そうですか、わかりました。帰りのホームルームが終わったらすぐに生徒会室に来ます」
「うん、頼んだぞ」
先輩からの頼み事はいつもこんな感じで軽く終わる。いつもの事なのだが、今日はやけに緊張してしまった。やっぱり、後ろめたいって気持ちがあるんだろうか。
時間が経つのが早いなと思っているとあっという間に放課後になった。
「…おーい、新戸～」
「え？何だよ？」
「ぼーっとしてるけどどうしたの？やっぱりばれちゃったの？」
田畑のその言葉に俺は首を振った。
「それはよかったと言うか……複雑なところですね」
中州の言葉に俺はため息をつくしかなった。
「じゃ、俺これから先輩の手伝いがあるからまた明日な」
「うん、また明日」
「それでは失礼します」
つい中原さんを目で探してみたけどクラスにはいないようだった。
「あれ、中原さんはいないのか？」
「うん、もう帰っちゃったよ」
「そうか」
別に未練があると言うわけじゃないのでそのまま生徒会室へと赴く。
「先輩、きましたよ」
「そうか、じゃあ今日何をするのか言わなくてはいけないな」

先輩は腰まで長い髪の毛をまとめており、箒をもっている。何をするのか大体想像がつく。
「見ての通りだが、生徒会室の掃除を行う。他の生徒には私と新戸が掃除を行うと言う旨を伝えて帰ってもらった」
「わかりました」
「新戸は私の机が無い方を掃除してくれ」
「はい」
身の回りの事は自分でやりたいのだろう。まぁ、私物があるからな。たとえ彼氏といえどみてもらいたくないものがあるのかもしれない。
他の生徒の私物はあっても筆記用具ぐらいだろうか？比較的重たい机のところも何とか動かして掃除をする。
「こちらは終わったからそっちを手伝うぞ」
「あ、こっちももう少しで終わります」
先輩より少し遅れて俺も掃除を終える。粗末に扱うと股間を殴打すると言われる狸の置物を拭いた時は縮みあがっちまったぜ。
「新戸、御苦労さま」
「お疲れ様です……あの、先輩」
思ったより終わった時間は早かった。これからお祭りに行っても十分楽しむ事が出来るだろう。先輩をお祭りに誘うつもりで口を開きかけたが、口から出た言葉はお祭りに誘う言葉ではなかった。別のいい方法を思いついたのである。
「ん？どうした？」
「えっと、ちょっと待っててくれませんか？」
「ああ、いいぞ」
「すぐに戻ってきますんでっ」
俺は誰もいない廊下を全力疾走で駆け抜け、階段も気合で飛びおり続けた。そして、靴を履くと先ほどと同じで全力疾走……お祭り会場まで五分程度でたどり着けた。
「ふぅ……はぁ……はぁ…」

たこ焼き屋を見つけ、二パック購入する。
「まいどあり～」
たこやきのパックを二つ持って学校へと戻ろうとした……その時だった。
「風太郎君」
「え？な、中原さんか…」
祭り会場にいたのは普段着の中原さんだった。
「風太郎君、今日も来てたんだね？一日じゃ足りなかったの？」
身体から異様なほど汗がわき出てくる。
「はは、いや、違う。見ての通り走って此処までわざわざたこ焼きを買いに来たんだよ。たこ焼きとか普通ないからな」
「そっか、今一人？」
「そりゃ全力疾走で来たから一人だよ」
「ふーん、そっか」
「中原さんも一人？」
「ううん、今日は友達と一緒」
「そっか、じゃあ俺急いでるから。また明日」
「うん、またね」
学校へと帰る途中、俺は気が気じゃなかった。もし、俺が先輩を誘って夏祭りに行っていたらどうなったんだろうか。奇跡的に中原さんと出会わない？いや、多分それはないだろう。中原さんがいたのは入り口前ぐらいだったし、絶対に目についてしまうこと間違いなしである。
「ただ今戻りました」
とりあえず危険は回避されたんだからいいとしよう。俺は気持ちを入れ替えることにした。
「お、祭りに行っていたのか？」
「ええ、先輩、たこ焼き好きでしょう？」
「ああ、大好きだ」
俺からたこ焼きを受け取った先輩は早速食べようとしたが、待っ

たをかける。
「先輩、屋上に行きませんか？」
「屋上か？」
「ええ、先輩なら鍵持っているから開けられるでしょうし」
「うーん……新戸の頼みじゃ仕方がないな」
「ありがとうございます」
その後、先輩と一緒に屋上に上がってたこ焼きを食べ始める。
「少し、冷めてますね。すみません」
「いや、暑くても食べられないから気にするな」
ちらっと腕時計を見るとそろそろ時間である。
大きな音がしたかと思うと夜空に花火が撃ちあがった。
「そうか、今日は花火が撃ちあがるのか…」
「特等席です。先輩じゃないと見ることできないでしょうね」
「そうだな…」
あまり大きな祭りではない為に花火は長い間撃ちあげられると言うわけじゃない。十分程度で花火も終わってしまう。先輩の驚いたような表情もそれで終わってしまった。
「さぁ、そろそろ帰りましょうか。見周りの人が来るでしょうし」
「……ああ、そうだな。新戸、すまない」
「何がですか？」
「いや、色々と新戸は考えているんだなぁと今日は勉強になったよ」
「特に何も考えてないですけどね」
先輩の心に少しでも残ってくれればいいなぁと思いつつ、俺は屋上を後にする。ただ、ちょっと気になったのは先輩がどこか暗い表情をしていた事であった。

第十四話：夏祭りの余りモノ

第十四話

「夏祭りに行こうよ、兄貴っ」

「愛夏、そういうのはお前が俺の家にやってきたときとか、最初に言う事だぞ」

既に目の前には祭り会場がある。手を伸ばせば浴衣姿のお姉ちゃんの胸をタッチ出来るぐらいの差しかない。

まぁ、夏祭りの三日目はさすがに人が減ってきているため穴場と言えば穴場である。しかし、花火も二日目で終わるし、特にこれと言って説明することなんて無いだろう。売れ残りの金魚をすくったりするか、屋台を適当に冷やかす程度で終わるだろう。

「さ、お賽銭投げに行こうよ」

「えー、俺一日目で投げ入れたんだけど？」

「来たら投げないと駄目だよ」

神様は俺からいくらしぼりとれば気が済むんだろうか？

結局は無駄な抵抗であり、愛夏に引っ張られていくわけだ。

「おろ？」

「どうしたの？」

「ん～いや、どこかで見た事あるなぁって後ろ姿を見つけたんだよ」

そのどこかで見たことある後ろ姿はおもむろに財布を取り出すとお賽銭を投げいれる。そして手を叩いて一生懸命お願いしているようだった。

一分、二分、三分……五分経過しても動きが無い。

「ねぇ、兄貴、時間の無駄だから早く入れようよっ」

「ああ、悪い悪い。そうだな。行こうか」

愛夏を引っ張って賽銭を投げいれる。愛夏がお願い事をしている間に俺は未だ何かお願いごとをしている人物の隣まで移動すると肩に手を置いた。

「田畑、お前いつまでお地蔵さんになってるんだ？」
その後の田畑の行動はほんの一瞬に起こった事である。目を見開き、俺を捉え、口を開けて尻もちをついた。
いつも面白い奴だが、今日はいつにもまして面白かった。口をパクパクして俺を指差している姿なんて写メでつい撮ってしまったぐらいだ。
「に、新戸……ど、どうして此処にいるの」
「ん、まぁ、色々とあるんだよ」
「だって三日目だよ？新戸は三回目だよね？今日のお昼休みだって先輩と楽しかったって言ってたじゃん」
「俺も来たくはなかったんだけどな」
いまだ尻もちをついている田畑が目立ち始めたので俺は起こしてやることにした。
「えっと、誰かと一緒に来たの？」
「ああ、妹分と来た」
「妹分？」
「あれ」
「えーっと、あそこで必死に『兄貴が別れますように』ってお願いしている子だよね？」
「なぬっ」
愛夏は念仏を唱えるように呟いていた。そんな愛夏に俺は近づいてため息をつく。
「あのなぁ、愛夏。そういう願い事は口にしちゃ叶わないぞ」
「突っ込むところそこ？」
愛夏は俺の方を見た後に隣の田畑へと顔を移す。そして居住まいを正すと人差し指を田畑へと突きつけた。
「あんたが兄貴の彼女ぶってるっていう中原美奈子？んならいうけど、あんた男を見る目がこれっぽっちも（人差し指の腹と親指の腹が限りなく近い）ないからっ。兄貴はすっごく変態で親戚の愛夏に向かって『ちゅーがしたい』とかいきなり言ってきて実際にするほ

ど変態なんだからっ。だからあんたみたいなどこにでもいそうな人間じゃ相手出来ないっ……だから、別れたほうがいい。いや、別れろっ。あんたみたいなひどい人間は…」
「ストップ、愛夏。こいつは中原さんじゃない」
「え？」
俺は周りの人の中に知り合いがいないかどうか確認して胸をなでおろし隣の田畑を紹介することにした。
「こっちは俺の親友で悪友の田畑焔。世話になっていると言うか、俺が世話をしていると言うか何と言うか……」
「ねぇ、新戸、このちんちくりんって本当に新戸の妹分？礼儀がなってないよ」
「お、おい田畑……」
「ち、ちんちくりんっ？愛夏のどこがちんちくりんだって？」
愛夏の目に炎が見え隠れする。
「ん～…全体的かな。中学生？」
「いや、俺らの一つ下だぜ？」
「へぇ、気が付かなかった」
愛夏が皿に怒るんじゃないかと思ったが、耐えたようである。
「あんたと別に話すことはないから。兄貴、もう行こうよ。あっちで楽しもう」
「え？ああ」
愛夏が俺の手を引いたのでそっちへ向かおうとすると途中で足が止まる。
「どうしたの兄貴？」
「新戸、ちょうど会ったんだし一緒にお祭りまわろうよ」
どうしてこういう時にそういう事言うかなぁ。ほら、愛夏の目を見てあげなよ。消えたはずの火が再び灯されてるじゃないか。
「放しなさいよっ。兄貴は愛夏の兄貴なんだからっ」
愛夏は相手の挑発が三度の飯より好きなのである。
「おい、愛夏、そんなに引っ張るなって」

もちろん、愛夏の反対側にいる人間も似ている性質を持っていたりする。
「へぇ、そっか。でももう高校一年生にもなって『お兄ちゃ～ん』とか信じられないから辞めたほうがいいよ」
「あんたには関係ないでしょ」
「うん、関係ないから早く新戸の手を放してよっ」
「あたしだって新戸って名字だもん」
「……風太郎の手を放してよっ」
実に不毛な争いは数分続けられた。その間、俺は周りの視線を一生懸命耐えていたわけだけども……そろそろ限界が近かった。
「……三人で一緒にまわろう。それなら文句が出ないだろ？」
「え～、だって兄貴…」
「だってとかそういうのはなし。これ以上此処にいると変なうわさがたつからな。ほら、田畑も行くぞ」
「う、うんっ」
田畑の手を引き、愛夏の手を引っ張る。全く、俺の周りは協調性という奴を知らないのかね？
楽しむためにお祭りに来たのに疲れるとは思わなかった。
「兄貴、射的がやりたい」
「新戸……いや、風太郎、わたしもやりたいっ」
「はぁ？……ったく、しょうがないな」
暇そうに店番していた茶髪の兄ちゃんにお金を払う。
「もう好きなだけ撃っていいから」
何やら着かれている表情の兄ちゃんの言葉通り、二人は好き勝手撃ち始めた。ただ、腕の差は歴然のようで田畑はキャラメルの箱やら何やら次々に撃ち落としていく。
「へぇ、やっぱりうまいな」
「まぁね」
そして愛夏の方はかすりもせずに弾が通過してしまっている。
「愛夏、かすってすらないぞ」

「う、うう…」
「下手くそだねぇ」
優越感に浸ったようにキャラメルの箱をちらつかせる田畑。たとえ相手が幼稚園児だとしてもこいつは本気で狙い撃っていた事だろう。
「う、べ、別にへたってわけじゃ…」
「ほら、手がぶれているからこうやってだな…」
後ろから身体を支えてやると愛夏は何故か優越感に浸った表情で田畑の方を見ていた。
「よそ見をするなよ」
「うんっ」
それでもやっぱり外れるものは外れるものでしょぼいアヒルが一個手に入っただけだった。
「兄貴にあげる」
「俺は要らん」
「そっか、じゃあ愛夏が後生大事に持ち歩くよ」
どうせ三日後ぐらいには無くしてそうだけどな。
その後も勝負できそうなものを見つけては二人で争い続けた。金魚すくいでは金魚丼を完成させ、輪投げで店主の首にかけ、店主にじゃんけんで買ったら一本増えるチョコバナナでは両方負けてドローとなった。
純粋に祭りを楽しめたんじゃないかと二人がけ用のベンチに無理やり三人で座りながらそう思った。両手に花の状態で羨ましいって？はは、冗談言ってると顔面にビニール袋いっぱいの金魚ぶつけるぞ？
「愛夏、楽しかったか？」
「…兄貴と二人だけだったらもっと楽しかった」
「意外だったよ。風太郎と一緒にお祭り行くのが楽しいなんてさ」
「そんな事言うぐらいなら兄貴と一緒にまわらないでよ」
「うーん、おまけが要らなかったかなぁ」

「ふん、お邪魔虫…」
「ちんちくりん」
愛夏の眉がつりあがったので俺は立ち上がる。
「さ、そろそろ帰るか」
「ん、そうだね。今日はぐっすり眠れそうだよ」
田畑も伸びをしながら立ち上がった。
「愛夏、帰るぞ」
「うん」
愛夏の手を引いて歩きはじめる。数歩進んで田畑が付いてきていないことに気が付いた。
「田畑、どうした？」
「いや、冷静に考えてみたら邪魔して悪かったかなぁって。だから先に帰っていいよ。わたし少し遅れて変えるから」
田畑がそう言ったので俺は無理やり手を掴んで引っ張ることにした。
「あ、だから先に帰っていいってば」
「あのなぁ、今のご時世…男が襲われる時代なんだぜ？」
「いや、大丈夫だって」
「根拠ないだろ」
「だって愛夏ちゃんが怒るだろうし」
「……兄貴が決めたのなら反対しない。愛夏、そこまで我儘じゃないから」
十分我儘である。
結局、両手に花の状態で田畑の家までやってきた。
「じゃあな。ちゃんと歯を磨いて寝るんだぞ」
「うん、おやすみ」
「おやすみ」
愛夏は無言で田畑の方を見ていた……が、その首がいきなり急降下。どうやら眠たいようで足取りも危ない。
「兄貴～、おんぶ～」

「やれやれ、しょうがねぇな」
愛夏をおんぶしていると田畑が笑っていた。
「いい妹分だね」
「やらんぞ」
「要らないよ……けど、本当にありがと、風太郎。じゃあね」
今年の夏祭りはいつもと違って楽しかった。きっと、こんな楽しい事がずっと続いてくれれば平和なんだろうけどなぁ。
夏休みまで残す行事は期末テストのみである。

第十五話：名実ともに

第十五話

テスト期間中の放課後、憧れの先輩である加賀美美奈子先輩と一緒に図書館でお勉強できる。そんな人間がいたらマジで羨ましい。

「風太郎～ここがわからないんだけど」

「中州君に聞きなさい」

「今回の当番は新戸君ですよ」

現実はピンキリのクラスメートと共に教え教えられの勉強会である。勉強なんて本当は1人でするもんなんだけどな。田畑に教えなくてはいけないと言うプレッシャーの為、いつもの倍勉強する羽目になった俺の事を誰かいたわってほしい。

「ねぇ、風太郎～早く教えてよ」

「そこは……おっと、単純な計算ミスじゃねぇか。最初の方のミスだけだぜ」

「え、そうかぁ…このぐらいの計算ミスなら今回は満点採っちゃうかも」

「中州、あんなこと言ってるぜ？」

「誰しも一度は自分の事を特別だと思うものです。そして、挫折を味わうのですよ」

そんな感じで茶化していたのが期末前日。その日の晩は愛夏の勉強を教えてやって寝たわけだ。

まぁ、安定した感じで期末試験は終わりを迎えた。そして、数日経って結果が返ってくる。

結果報告としては中州、田畑共に全教科満点。俺が平均八十点程度といったところだろうか。

「へへ～ん、どう？どう？すごいでしょ？惚れちゃ駄目だよ？」

「あ～はいはい、すごいすごい。中州、特別視していた奴は挫折を味わうんじゃないのか？」

「次からですよ、新戸君。これから驕って勉強をしなくなるのです。じゃあ最下位だった新戸君は約束通りジュースを奢ってください」
「へいへい」
「あ、わたしは大きい奴じゃないと嫌だから」
「あたしも加わっていいかな？」
中原さんがやってきて机の上にテストの結果を置く。どれも九十越えばかりで俺の最下位はかわらないようだった。
「……はぁ、じゃあ場所は中州の家でいいか？」
「構いませんよ」
途中お菓子とジュースを買って中州の家へと向かう。
「ねぇ、風太郎君」
「ん？」
「中州君の部屋ってやっぱり本ばっかり置いてあるの？」
「ああ、そうだな。それと結構大きなモニターがある」
「モニター？」
「中に中州の彼女がいるんだよ」
いまいち納得できていないような表情である。無理もないだろうな。
「それってどういう…」
「ほら、もう付くから実際に見たほうがいいぜ」
比較的大きな洋風の家。それが中州の家である。もっとも、高級住宅街に建っているわけでもないので周りの家が小さく見えるだけなのかもしれない。泥棒とか結構頻繁にやってきているようだがこれがすごいことに一度も侵入されずお縄となっている。
「ただいま」
「お邪魔します」
「おじゃましまーす」
「おじゃまします」
中州の両親が帰ってくるのは夜遅く。休日に会った事があるけどとてもいい両親で此処の家に生まれてくればよかったと何度思った

事だろうか。ただまぁ、放任主義者みたいなもので『お前が学びたいと思うのなら学べ、必要なものは買いそろえてやる。だらけた人生を歩みたいのなら勝手に歩むといい』そういった事を中州に言ったそうだ。やっぱり中州じゃないといい点数とれないんだろうなぁ。俺が此処の家の息子になったらだらけてそうである。

階段を上って部屋に案内される。

「しっかし、大きくて綺麗だよなぁ」

「うん、風太郎の部屋ってば汚いもんね」

「うるさいわい」

「はじめてみたけど本当、整頓されてるね。あ、あれが噂のモニター？カメラもあるね」

何も表示されていないモニター、そしてカメラを中原さんが指差す。中州が俺の事をじーっと見ていた。

「新戸君、出来ればそういう事をあまり他言して欲しくないのですが」

「あ～……悪い」

「もう行ってしまったので仕方がありません」

「すまん」

「やーい、怒られてやんの」

田畑にからかわれても反論は出来ない。クラスの九割がその事実を知っているが（田畑が言いふらした）それでも中州は秘密にしておきたいらしい。クラスの連中はそれを尊重している為、それ以上の秘密漏えいは守られている。

「このモニターは外国にいる僕の許嫁の部屋とつながっているのです」

「え？許嫁って…子供のころから結婚する人が決まっているあれ？」

「はい。からかわれるのが嫌いなので秘密にしているんです」

「今また風太郎が広めちゃったけどね」

「元はお前が秘密をばらまいたんだけどな」

「程度はどうであれ、秘密をばらしたという事実には変わりません

よ」
「すまん」
「ごめん」
中州に睨まれて頭を下げる俺と田畑。まったく、中州も友達を選ぶべきだ。
「ねぇねぇ、ジュディーちゃんと話さないの？」
「ジュディー？」
首をかしげる中原さんに俺は軽く説明する。
「金髪碧眼の可愛い女の子なんだよ。でもまぁ、ひきこもりらしい。うん、海外にも引きこもりっているんだな」
「新戸君、何勝手にしゃべっているのですか」
「あ…すまん」
謝りっぱなしである。どうせなら俺の家にいけばよかったかな。
「田畑さん、今日はジュディーの部屋とはつなげませんよ。嫉妬深い性格なので今度は中原さんの事について詳しく説明しなくてはいけません」
「そっかぁ、残念」
田畑が最初にカメラに映った時はおもしろか……いや、とても大変だった。鋭利な刃物を取り出して部屋を出ようとするジュディー……しかし、すぐに戻ってきて憤怒の表情を俺達に見せてくれた。それから約一時間ほど田畑の事を説明し、何とか収まってもらったのだ。いつも冷静沈着な中州が慌てまくっていたから面白い以外の何物でもなかった。
「あたしがカメラに映らない場所にいれば大丈夫だと思うけどどうかな？」
「無理ですよ。ジュディーはすごく勘がいいのです。聞いてみたところ女の勘だそうです」
女の勘……ねぇ。そこはちょっと納得できるかもしれない。
「ああ、そうだね。ちょっとジュディーちゃんの顔を見たかったけど恋する女の子の勘ってすごいからやめておくよ」

暗に俺に対して言われているような気がするのは俺の心がやましいからだろうか。
「そうしてもらえると助かります」
「ぽちっとな」
「おい、田畑…」
モニターに金髪少女が現れる。下着姿の女の子でさすが海外、レベルの高い身体をしていらっしゃる。
「風太郎、久しぶりね。それに焔も」
「やっほー」
「ひさしぶり」
「あらあなた……その女の子は……誰？」
まぁ、何だろうか。その後はカメラに映る中原さんを見て激怒。一生懸命説明する中州を俺と田畑はカメラに映らない場所からすごく心配しながら見守っていた。
「あ、このお菓子おいしいねぇ」
「新商品だったからスーパーとか行けばまだ売ってるだろ」
「今度買ってみよーっと」
スピーカーから聞こえる怒号は恐ろしいもので中州の身の破滅が近付いているような気がしてならない。
「新戸君、助けてくださいっ」
「はぁ？俺が？」
「ええ、早くこちらへ来てください」
言われて中州の隣へと赴く。中原さんと腕を組まされた。
「ジュディー、この二人が恋人同士なので僕とはあまり関係が無いのです」
「……風太郎本当？」
「えーっとだな……」
「本当ですっ」
中原さんは胸を俺に押しつけながら宣言した。そんな俺らを見ながらジュディーは黙り込んでため息をつく。

「そうみたいね、あなた、ごめんなさい」
「やっと信じてくれましたか……」
力なくその場に座り込んだ中州は老けこんで見えた。お疲れ様である。
中原さんとジュディーが一緒にしゃべっている中田畑が俺に近づいてきた。
「ねぇねぇ、名実ともに恋人同士になっちゃったようだけど本当にどうするの？」
「どうするって…」
「自然消滅なんて限りなく無理だと思うよ。まだ何とかなるって思ってる？」
「……」
楽しそうに笑う中原さん。よく思えば悪い子じゃないし、むしろいい子だ。いや、だからこそ俺のような優柔不断な男には不釣り合いのはずである。
「ど、どうにかするさ」
「お、言ったねぇ。期待してるよ」
田畑がジュディー達との会話に参加しに行ったようなので俺は中州と話すことにした
「大丈夫か？」
「ええ、今回は結構早く終わってくれましたからね。これも新戸君のおかげです。しかし、田畑さんの保護者である新戸君がしっかり見てくれていなかったからあのような事が起こるのです」
「別に俺はあいつの保護者じゃないが……すまん」
「今回は助けてもらいましたから何か困った事があったら言ってください。その時は出来る範囲で新戸君を助けますので」
田畑が俺の事を助けてやると言ってくれるより、やはり中州の方が頼りになる。今後は中州の方にも相談した方がいいかもしれないな。

第十五話：名実ともに（後書き）

祝、アクセス数十達成。予定としては夏休みが終わるぎりぎりってところで終了なんですがね、予定は未定ですからわからないものです。しかし新戸風太郎という男は確実に追い込まれていってる感があって残念です。中原美奈子と仲良し子良しになってしまうのか、それとも加賀美美奈子と一緒にいることができるのか、はたまた違う未来が待っているのか、どうなんでしょうね。

第十六話：ダークホース

第十六話

学校が夏休みになっても部活動を盛んにしている生徒たちは学校へ、それ以外は特に制約もなく自由に過ごしている。

俺は後者の方で部活はやっていない。第一の理由に面倒だ、第二の理由も面倒だ、第三の理由が早く帰れないからである。

どうでもいい事だが、夏休みの過ごし方なんて人それぞれであろう。さっき言った通りの部活や、普通に勉強をして過ごしたり、家族や友人たちとどこかへ遊びに行くかもしれない。ああ、中には一人暮らししている兄弟やらが家に帰ってきたりもするかもな。

俺も何処かに遊びに行く部類だが、一人である。

夏休みの宿題もある程度終わらせて一人で市民プールへとやってきた。それなりに人も多く、泳ぐにはちと狭い場所である。

パンツを着用し、プールサイドへと移動。見知った顔が絶望的な表情でプールを眺めていた。

「田畑、不景気そうな面してるな」

「ふ、風太郎っ…」

何を見ているのだろうかと先ほどまで田畑の見ていた場所を視界に入れようとすると田畑が俺の手を掴んで引っ張った。

「お、おい…何だよ？」

「風太郎にちょうど用事があったんだよ。ちょっと着替えて付き合ってよ」

「別にいいけど、お前……そこは……」

「きゃーっ……」

「失礼しましたぁっ」

田畑のアホめぇ～……なんで俺を女子の更衣室に連れて行くんだよっ。

監視員を何とかまいて肩で息をする。

「このクソ暑いのになんでプールに入れず俺は走ってるんだよっ」
「それは風太郎が女子の更衣室に入ってくるからだよ。全く、油断も隙もあったもんじゃないね。スケベっ」
「あのなぁ……お前が連れて行ったんだろ？」
「そうだった？」
全く、都合の悪い事はすぐ忘れるんだから困ったぜ。
ファーストフード店に入って一息つく。適当なメニューを選んで待っていると田畑が先ほどのような暗い表情になっていた。
「何だ、何かあったのかよ？」
「え、ああ……ちょっとね。わたしの事じゃないんだけどすっごく信じられないことがあったって言うかさ…」
歯切れの悪い田畑である。いつもは口にガムテ付けてもしゃべるようなやつなのにどうしたんだろうか。
番号を呼ばれたのでメニューを取ってくる。やはり田畑の表情は明るくならなかった。
「田畑、俺のポテトやるから元気出せよ……って、許可を出す前から勝手に食うなよ」
「……うん、ありがとう」
「ったく……そういえば田畑と会って一年ぐらいになるか」
「ん、ん～…そうだっけ？」
「そうだよ。思えば一年前に……うーん、正直に言ってちょっと信じられないやつに出会ったなと思ったぜ」
「え？そうかな？わたしは新しい友達で来てよかったなーぐらいだったよ」
一年前、本当に馬鹿らしい事をきっかけに田畑と出会ったもんだ。
それじゃあ回想スタート。

外に出て何処か涼しい場所へと行こうかと考えたのが十分前、外に出てきて後悔したのが六分前、そろそろ日射病か熱射病で倒れそ

うなのが今現在だ。
「あちぃ〜……」
中州の家にでも行って涼もうか、それとも大人しく図書館に夕方まで引きこもったほうが利口なのか、どっちなんだろう。
どっちに行っても勉強しなくてはいけない雰囲気になるだろう。やめておこう、それならコンビニに行ったほうがまだましである。
「この暑さはどうにかならないもんかねぇ」
よろよろしつつも、何とか正気を保っている俺の耳に誰かの足音が聞こえてくる。聞くところによるとどうも走ってきているらしい。まるで誰かを追いかけているようだった。
「この財布ドロボーっ返しなさいよっ」

どうやら、俺を追いかけていたらしい。しかし、追いかけてくるような知り合いはいない。

ちょうど背中の真ん中あたりに何かが直撃。俺はほんの一瞬解き放たれた籠の鳥となった……そして、墜落した。
「あいたたた……あんた、いきなりなにすんだっ」
胸倉つかまれて俺を睨んでいるのは中性的な顔立ちの人物だった。ショートカットがさらにボーイッシュとやらに貢献している。
「だから、財布返しなさいよっ。ほらほらほらほらほらほらほらほらっ」
俺と同じくらいの身長のため、ちょっと上の方に持ち上げられ揺さぶられると足が宙に浮き、気分が悪くなる。馬鹿力め…。
「おいおい、冷静になろうぜ？」
暑くなると人間、判断力が無くなるものだと俺の父ちゃんは言っていた。もういい年した大人なんだから暑さぐらいで叫んだりはしないとも言っていた。
『ちっくしょうっ暑いんだよ馬鹿野郎―っ。ちょっと風になってくるっ』

そういって自転車こいで川に落ちたのが一昨日の事だ。
そんな恥ずかしい大人にならない為にも物事悟っちゃってますって言う今はやりの高校生を目指しているのだ、俺は。
「冷静に、穏便に済まそうぜ」
「はぁ？」
「いや、はぁ？って言いたいのはこっちなんだよ。あらぬ疑いをかけられているんだからな」
「わけわからない事を言わないでよっ。ほら、来なさいよっ」
そのまま警察に連行されるのかと思ったら連れてこられたのは公共の女子トイレだった。
「おいおい、ここは女子トイレだぜ？」
「何？あんた、わたしに男子トイレに入れって言うの？身の潔白を証明できる自信があるのならついてきなさい、そうじゃないなら警察呼ぶから。どの道、わたしの財布を持っていたら問答無用で警察に女子トイレにはいっていたとか罪も重ねるから」
とんでもない奴である。
「じゃあなかったらどうするんだよ？変な言いがかりつけたお礼はちゃんとしてくれるんだろうな？」
「もちろんよ」
正直、てっとりばやく警察呼んでもらった方がいいんだけどな。しかし女子トイレで何をするのだろうか？とりあえずついて行くことにした。
個室に二人で入る。今から何をされるんだろう？
「脱ぎなさいっ」
「は？」
「だから、脱げって言ってるの。隠し持っているんでしょうからね」
「ねぇってばっ」
「抵抗するなんてますます怪しいわねぇ」
誰だって抵抗するだろ。
結局、舌打ちしながら上を脱いだ。

「ほら、どこにもないだろ？」
「下も脱ぎなさいよ」
「……わかったよ」
ズボンを脱ぐともうパンツ一丁。うう、何の罰ゲームだよ。
「両手を上に向けて、ジャンプしなさい」
「へいへい」
俺のズボンをあさりながら（入っているのは所持金千円程度の財布、そして携帯だけ）そう指示する。
「ほら、何も出てこないだろう？」
「……脱いでよ」
「何を？もうこれ以上脱げるものは何もないぞ」
「股の間とパンツのところでわたしの財布が蹂躙されている可能性があるわっ」
素早く伸ばされる女の腕。俺は素早く迎撃するため両手を動員する。
「ねぇよっ、ねえってばっ」
女にトイレに連れ込まれた揚句、剥かれるとか冗談じゃないっ。お婿に行けなくなってしまいまするっ。
互いの攻防が続き、数分が経った。暑い上に狭い空間に二人いるせいで湿気がすごい。
「じゃ、じゃあこうしましょう」
「なんだよ？」
女は手を放し、俺も警戒しつつ引き下がる。
「パンツは下げないから両手を上げなさい」
「信じられるかよ」
「ほら、私も片手を上げるから。片手で脱がそうとしても腰を引かせれば大丈夫でしょう？」
「……ああ」
言われた通りに両手を上げる。こいつ、何をするつもりなんだろう。

「じゃあ行くわよ」
「は？」

すぐに想像出来た人はすごい。奴は臆することもなく、俺の股間を片手で握りしめたのである。

「おぅふっ」
「……ないわね？」
散々揉みしだいた後、女は考えているようだった。口の中にあるんじゃないかという思考にたどりついたら俺はどうなってしまうのだろうか。それとも、解放するかどうか悩んでいるのだろうか。
突如、女の携帯電話が鳴りだし、それに出る。俺はちょっと痛む股間を抑えて情けない事に中腰になっていた。後で滅茶苦茶になっていないか確認しないといけないな。
「もしもし？え？財布そっちに忘れていたって？あ、あ～、玄関に落ちてたんだ。うん、うん、ありがと、じゃあね～」
「俺は無実だったんだろ？」
電話を終えた女に向かって尋ねる。
「う、う～……」
「そうなんだろ？」
じゃあ約束通り言う事を聞いてもらおうか……ほら、しゃぶ……何でもない。
「あんたの顔は二度と忘れんっ。そこをどいてくれ」
女を突き飛ばし、俺は外に出る。
結構綺麗なＯＬさんと鉢合わせした。
「こ、ここ…女性用トイレですよ。ぱ、パンツ一丁で何しているんですか？」
こういうときは変に怖気づいてはいけない。堂々としていなくて

はいけないのだっ。そういうわけで俺は両腰に手を当てて堂々と仁王立ち。
「見てお分かりにならない？男が女子トイレにて個室からパンツ一丁であなたの前に現れた。つまり……」
「つまり、へ、変態ですかっ。きゃーっ、誰かーっ」
その後、俺はクソ暑い中悲鳴に追われて家に逃げ帰ったとさ。

俺が田畑の名前と顔を知ったのは二学期になってからだった。放課後、校舎裏に呼び出されて友達になってほしいと言われたのだ。てっきり告白されるもんだとばかり思っていた俺は肩すかしをくらって数秒ばっかり呆けた記憶がある。
「風太郎ってばわたしの顔を忘れてたもんねー」
「そりゃあなぁ」
「二度と忘れないって言っていた割にころっと忘れてたんだもん。学校で鉢合わせしちゃった時は心臓が口から出てくるかと思ったよ。あのドキドキを損したなぁ～」
すっかり氷の溶けてしまったジュースを口に運ぶ。うん、薄い。
「あれから俺はお前にずっとまとわりつかれてるからな。おかげで下着泥棒の汚名までついちまった時期があったんだぜ？」
「あははは～ごめんごめん」
「全く……」
また薄くなったジュースを口にする。なんど口にしたところで味は変わらない。
「えーっとさ、あの時の何でも言う事を聞くって今でも有効だから。今だから言うけど、あの時、やらしいことされるって思ってた」
口に含んだジュースは田畑の顔へと直撃した。
「あ、悪い」
「悪いじゃないよっ」

「ほら、拭いてやるから…」
顔拭いてやると何故だか幸せそうな顔をしていた。変な奴だ。
「あのさ、風太郎の事を想っているから言うけど…二学期始まるまでに結論出なかったら別れたほうがいいよ」
「なんだよ、わかってるってば。頃合いを見計らって中原さんに言うよ」
「ううん、別れるのは会長さんとだよ」
「はぁ？なんでだよ？」
土砂降りの中、お天気おねえさんが『今日はいい天気ですね』というぐらい違和感があった。
「理由は…いえないけどさ」
「あのなぁ、たとえ理由があってもはい、わかりましたって言えるかよ。大体、お前は俺を応援してくれるんじゃなかったのか？」
激高しかけた俺の手を奴が掴む。冷房が効きすぎているのに奴の両手は熱かった。
「うん、応援した……いや、したかったんだよ。でも、それでもわたしは風太郎の味方。もし、結論出せなくてわかれなかったらわたし、実力行使で行くから」
「実力行使ぃ？」
武力介入でもしようっていうのか？俺が、俺たちがお邪魔虫だって感じで？
「うん、二股してるってばらす」
「た、田畑お前……」
味方じゃないだろ、それは。一番ばれちゃまずい相手にそれを言うのは絶対に駄目だ。
「もうひとつ切り札……」
「まだあるのかよ」
「ん、これ…」
田畑焔の唇が俺の唇に当たる。慌てて離れ、自分の唇を指で触る。
「……お、お前なぁ……何するんだよっ」

「いいじゃん、別にずっといるんだし。これを言うし、生徒会長の前でするからね。じゃあ、わたし行くから」
田畑の顔が赤いのはなんでだろう。きっと、俺の顔も真っ赤のはずだ。それから約一時間俺はそこに居続けた。店員が迷惑そうな顔をしている事に気づきようやく出ていったのだ。
家に帰る途中も頭の中では田畑の表情が脳裏によぎる。
「友達になってほしいって……いや、俺の考えすぎか」
とりあえず、今のままの状態ではいけないだろうな。どうにかしなくてはいけない。

第十七話：男の悩みは尽きません

第十七話

男が困っているのだ、誰に相談する？ママか、先生か、それとも行きつけのバーのママか……いや、どれでもない。男に相談するものだ。ナニが問題ある？病院に行ってお医者さんに相談しろ。

そういう理由で俺は許嫁のいる中州に相談することにした。これこれこういった事情で相談したいのでファミレスに来てほしいと呼んだのだ。来てからすぐにパフェなんか頼みやがって……しかも、新戸君が払ってくれますよね？とか……相談しているほうだから文句なんて言えないけどさ。

明日は学校に行かなくてはいけない。しかも、生徒会選挙があるのだ……。俺は立候補しないけど、中原さんがするとかしないとか……とりあえず、中原さん、先輩、そして田畑に出会う確率は非常に高い。

「中州、俺はどうすればいいんだと思う？」

中原さんの事、先輩の事、そして田畑がキスしてきた事を包み隠さず話した。あした、学校だし…中原さんの前で田畑と会っちゃったら俺はどうなってしまうのか想像もできない。

外の方が若干うるさいようだが、そんな事は関係ない。俺の耳は今、中州の言葉だけしか聞こえない様に集中している。貴い意見を待っていると、さっさと口を開いてくれた。

「怪我をしたとき、すぐに処置をするのが基本です。新戸君はちょっと処置するのが遅すぎたのではないでしょうか？」

「じゃ、じゃあ俺はどうなるんだ？」

「それはまぁ…運任せという言葉がお似合いですかねぇ」

「……そうかぁ……」

意外とどうにかなっちゃうものかもしれないし……いや、甘い考えかもしれないな。

考え込んでいると中州がテーブルを軽く叩いていた。
「なんだよ？」
「外、ここから見える路地裏で不良が一人、集団戦で一方的に殴られていますよ」
「はぁ？そんなの放っておけよ。不良同士のけんかだろ？そんなのに首をつっこんでいられるかよ」
「相手が不良だろうと助けなくては生徒会長に嫌われるのではないでしょうか？」
「別に……先輩は見てないだろ？」
「見ていない、だからこそ助けなくてはいけません。もっとも、僕が見ているので後で告げ口しようかと考えていますけどね」
心の中で舌打ちし、立ち上がる。全く、変に正義感のある面倒な友人だ。しかも、ついてこないし……。
基本、普通の人間というのは不意打ちに弱い。不意打ちに強い奴がいたらそいつは小さい頃から特殊な訓練を受けさせていること間違いなしである。
一人蹴飛ばし、俺は中指を立てた。
「何だてめぇ？」
そういった奴の顔面に遠慮なく拳を叩きこむ。残った奴の胸倉をつかみ、俺はにらみをきかせる。
「てめぇら、誰だかしらねぇが警察に連絡させてもらったからなぁ。見たところ高校生のようだが……ははぁ、暴力事件か。面倒なことしやがって。このファミレス付近は俺らの縄張りなんだよっ、余所もんがちょろちょろ目障りなんだよっ。まぁ、俺にこれ以上殴られたくないんだったらお前らが殴っていた奴、置いてけ」
「す、すんませんっ。お、おいお前ら行くぞっ」
逃げて行く途中、あいつらが中学生だと言う事に気が付いてため息が出た。
とりあえず怪我した男性をファミレスへと連れて行き、腰かけさせる。ちょっとざわついたがすぐに静かになった。

「あのー、大丈夫ですか？」
「ああ、なんとか…」
おしぼりで顔を拭こうとしたら自分でできるようで手を差し出される。
見た目がチャラい割に意外と普通の口調だった。そして何気にイケメンである。ちょっとでいいからそのイケメン度を分けてほしい。
「いやー、ここらも変わったんだね。まさか目があっただけでここまでやられるとは思わなかったよ」
「そうなんですか？」
「ああ、やはり茶髪にしてピアスはやめておいた方が良かったな。彼女と待ち合わせっていうことで気合を入れてきたんだけどなぁ……ついてないよ」
鼻血も拭きとり、やっと見えるような顔になった。それで何処かで見た事があるような顔だと言う事に気付いた。いや、ここ最近会ったとかそういった感じではない。
中州もそれに気が付いたようで口を開こうとすると声をかけられる。
「あ、けんちゃんまったぁ……って、どうしたのその怪我？」
「ああ、結衣ちゃん」
結衣ちゃん、といわれた人物を見て俺と中州は口を開けていた。何だろう、ちょっと失礼だけど結構太めなのだ。ふっくら、じゃなくてデブなのだ。およそ目の前の人物の彼女とは思えないほど不釣り合いなんだよ。そして、どう見ても歳が違うように見える。目の前の男性は二十代だろうけど、女性の方は間違いなく三十以上だ。
「結衣ちゃん、悪いけどこの人たちと合い席でいいかな？さっき襲われていたぼくを助けてくれた人たちなんだ」
「え、あー、うん、あたしはぁ、かまわないよぉ」
しゃべり方もうざいっ。
「じゃあ、あたしはぁ…ちょっとお手洗いに行って来るねぇ」
「うん、いってらっしゃい」

これは困ったことになったぞと俺は中州の方に視線を向ける。中州も俺の方を見ていたようでお互いにため息をついた。
「似合わないカップルだって思っただろう？」
「え、い、いや…」
「いや、いいんだ。よく言われるからね。でも彼女の前じゃそういうのはやめてほしい。傷つくからね」
「あ～はい」
「あの、僕達が御邪魔なら出ますけど？」
「いやいや、助けてもらったお礼もしたい。ここはぼくが払うから好きに食べて構わないよ」
人助けってたまにはいい事があるもんだな。まぁ、そんなに高いのは頼めないし、もう何か頼もうとも思わないけどさ。
見知らぬ人と何を話して間を持たせようかと考えていると中州が喋り出した。
「あの～、もしかしてあなたは羽津中学校の生徒会長をやっていませんでしたか？」
「え？ああ、やっていたよ」
「ああ、だからどこかで見たなぁって顔だったんだ」
「もしかして君たちは羽津中学の生徒さんなのか？」
「いや、その中学出身の羽津高校生徒です」
「なるほど…」
何か話したほうがいいのかもしれないが、会話はそこで途切れてしまっていた。はやく彼女さん帰って来ないかなぁと思っていると男性は両手を俺達に合わせてくる。
「じゃあＯＢの相談をうけてくれないかな？」
「俺たちもＯＢなんですけどね」
「じゃあ先輩として…実はね…」
声のボリュームを一段下げる為に必然的に俺たちは男性の方へと顔を近づける。
「ぼく、今…二股状態なんだ」

「え？」
「それはまた…」
中州はあきれたような顔をして何故か俺を見ていた。類は友を呼ぶんですね、最低ですよという意味の視線に間違いない。
「それがどうかしたんですか？」
「いや、ねぇ、これがどうすればいいんだろうかと悩んでいるんだ。何だろう、今の彼女とは小さい頃からの付き合いで勘づいているっぽいし、僕も成り行きで後の方の彼女を受け入れてしまったんだけど……やっぱり、結衣ちゃんの方がいいんだ。後にできた彼女ともこの前も一緒にプールに遊びに行ってしまった。本当はすぐに断るつもりだったんだけど楽しそうな彼女を見るとどうしても切りだせなかったんだ」
「……何か言ってあげてください」
この屑やろうっ、てめぇなんてさっきの連中にやられちまっていればよかったんだっ……と言いたいところだが、ブーメランで俺へと戻ってくること間違いなし。
「ん、ん～それならしょうがないんじゃないんですかねぇ」
中州は頭を押さえてため息をついた。
「新戸君……」
「ん？新戸？」
繁々と俺の顔を見て首をかしげる。
「もしかして…新戸風太郎君かい？」
「はぁ……俺の事を知っているんですか？」
「あ、いや……ごめん。今のは忘れてくれ」
男性は慌てたようにそう言って愛想笑いを浮かべている。
「ただいまぁ」
間延びした声が聞こえてきて、温度が少し上がったような気がした。男性の横に結衣と呼ばれた女性が座る。
「何の話してたのぉ？」
「え、ああ、助けてもらったお礼についてだよ。ね？」

「嘘ばっかりぃ、どうせ新しい彼女の話でもしていたんでしょう？」
何、鋭い人だな……。
「そ、そんなことないよ」
「あたしにはぁ、わかるもん。けんちゃんがそっちの子がいいって言うのならあたしぃ、別れるからさぁ」
「嫌だよっ、ぼくは結衣ちゃんがいいんだっ。今度家を出るときは家族に結衣ちゃんの事をちゃんと紹介するつもりなんだっ」
「けんちゃん…」
ひしと抱きしめあっている二人を俺たちは手持無沙汰に眺めていた。あ～、全世界のカップルに不幸が訪れねぇかなぁ。
「ごめんね、結衣ちゃん。ぼくは、ぼくは君との幸せのために他人を傷つける事を迷わないよっ」
「うんっ、あたしたちの仲を引き裂こうとした女にはびしっといってやってよっ」
この男性の二人目の彼女は気の毒だなぁと思いつつ、俺と中州は立ち上がった。
「あ、もう帰るのかい？」
「ええ」
「お邪魔のようですし…」
「気にしないでくれ」
見ていても心がすさむだけだ。いや、俺には彼女いるし、中州には許嫁がいる。でもまぁ、幸せかと聞かれたら不幸のどん底にいるような状態なので羨ましくて嫌なのだ。
「じゃあ失礼します」
「御馳走様でした～」
結局、俺は何をするためにファミレスにやってきたのかいまいちわからないままだった。
「そういえば明日は学校に行かなくてはいけませんね」
「そうだよ、だから中州に今日相談したんだよ」
「しかも、生徒会選挙ではありませんか」

「どうすりゃいいんだよ、俺。中州に相談したつもりが、無駄な時間をすごしただけじゃねぇか」
落ち込む俺の肩に中州の手が載せられる。
「大丈夫です、新戸君」
「中州…」
「何も持っていない状態に戻るだけですよ」
「……」
今度、ジュディーちゃんにエロ本を見せよう。うん、徹底的にお仕置きしてもらわないと俺の心が晴れない。

第十七話：男の悩みは尽きません（後書き）

たまにはあとがきっぽい事をやろうかなと思います。この小説は元『Ｍｙ　Ｒｏｏｍ　Ｇｕａｒｄｉａｎ』で投稿するつもりでした。主人公のもとへ親戚の引き籠りがやってきてハートフルなお話の予定だったんですけどね。なぜか今のような話になってます。少々粗雑ですが、終わりの方も頭の中では出来ていますので終わりも近いですかね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4875x/

チャック全開ですよ

2011年10月26日09時15分発行